

出雲都市計画道路医大前新町線 3 工区道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 2

## 神門寺付近遺跡 Ⅱ

2010 年 3 月

出雲市教育委員会



出雲都市計画道路医大前新町線 3 工区道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 2

## 神門寺付近遺跡 Ⅱ

2010 年 3 月

出雲市教育委員会





5区出土古墳時代前期　甕

撮影 杉本和樹



# 序

本書は、出雲市都市整備部街路課から委託を受けて、平成 21 年度に実施した出雲都市計画道路医大前新町線 3 工区道路改良工事予定地内に所在する神門寺付近遺跡の発掘調査の成果を記録したものです。

神門寺付近遺跡は、出雲市塩治町の神門寺の周囲に確認されている遺跡です。神門寺は塩治地区で最も古くから知られる寺院で、境内は昭和 35 年（1960）に「神門寺境内廃寺」として市指定文化財（史跡）に指定されています。

今回の調査では、中世の柱穴を確認し、古瓦片、陶磁器等が出土したほか、古墳時代の甕が出土し、神門寺の歴史及び建立以前の様子を知るうえで貴重な資料を得ることができました。

本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査と報告書作成にあたりご協力いただきました地元住民の皆様や、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 22 年（2010）3 月

出雲市教育委員会

教育長 中 尾 一 彦

## 例　言

1. 本書は平成 21 年度に出雲市教育委員会が実施した、出雲都市計画道路医大前新町線（3 工区）道路改良工事に伴う神門寺付近遺跡（島根県遺跡番号：W-146, 出雲市遺跡番号：F12）の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。平成 20 年度から調査を実施し、平成 20 年度の調査は「神門寺付近遺跡 I」として報告している。

2. 調査は下記の体制、期間で実施した。

調査地及び調査面積　　出雲市塩治町 826-13 ほか 230 m<sup>2</sup>

調査期間　　平成 21 年（2009）9 月 25 日～平成 22 年（2010）3 月 31 日

調査体制

事務局　花谷 浩（出雲市文化企画部次長兼博物館創設準備室長兼学芸調整官）

石飛幸治（同 文化財課長）

景山真二（同 埋蔵文化財係長）

調査員　曾田辰雄（同 主事）

調査補助員　勝部真紀（同 臨時職員）

整理作業員　飯國陽子、鶴口令子、妹尾順子、細野陽子、糸賀伸文

発掘作業員　安食 栄、大輝正人、金森光雄、新田幸男、星野篤史

3. 発掘調査、室内整理及び報告書作成にあたっては、次の方々や機関にご指導、ご協力を賜った。

記して謝意を表させていただく。（順不同・敬称略）

林 健亮、池淵俊一（島根県教育庁文化財課）

西尾克己（島根県古代文化センター）、澤田正明（島根県埋蔵文化財調査センター）

4. 本書の執筆・編集は曾田が行った。

5. 本書で用いた測地系は世界測地系第Ⅲ系であり、方位は座標北を示し、レベル高は海拔高を示す。

6. 自然科学分析は、株式会社文化財調査コンサルタントに委託し、結果を第 4 章に掲載した。

7. 本書で掲載した写真的撮影は、遺物写真の一部を西大寺フォト（杉本和樹）に委託し、その他は調査員が行った。

8. 本報告書掲載の遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会が保管している。

## 本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	5
第3章 調査の成果	8
第1節 調査の概要	8
第2節 4区の調査	9
1. 基本層序	9
2. 出土遺物	9
第3節 5区の調査	11
1. 基本層序	11
2. 2層上面の遺構と遺物	12
3. 遺構（3層）と遺物	12
4. 遺構（4層）について	13
5. 遺構（6層）について	15
6. 遺構（5層）柱穴（SP 10, SP 11）及び出土遺物	16
7. 包含層の出土遺物	16
第4章 神門寺付近遺跡発掘調査に伴う花粉・植物珪酸体分析	25
第5章 まとめ	31

## 挿図目次

第1図 調査区配置図（S 57, 58, 59 年度, H 20, 21 年度）（S=1:1,500）	3
第2図 神門寺境内庵寺出土瓦拓影図（上：丸瓦, 下：平瓦）（S=1:2）	4
第3図 神門寺付近遺跡と出雲平野の主要遺跡（S=1:100,000）	6
第4図 神門寺付近遺跡周辺の遺跡（S=1:20,000）	7
第5図 調査区位置図（S=1:2,000）及び土層堆積柱状図（模式図）	8
第6図 4区出土遺物実測図（S=1:3）	9
第7図 5区土層堆積状況及び遺構配置図①（左は2層柱穴, 右は3層ピット）（S=1:200）	10
第8図 柱穴実測図（S=1:40）	11
第9図 柱穴内出土遺物実測図（S=1:3）	11

第10図	墓壙SX01実測図(S=1:40) .....	13
第11図	墓壙SX01出土遺物実測図(S=1:3) .....	13
第12図	5区造構配置図②(左は4層、右は6層)(S=1:200) .....	14
第13図	SK01(下)及びSK02(上)実測図(S=1:40) .....	14
第14図	土坑SK02出土遺物実測図(S=1:3) .....	15
第15図	柱穴(SP11)実測図及び出土瓦実測図①(造構はS=1:20、遺物は1:4) .....	17
第16図	柱穴(SP10)実測図及び出土瓦実測図②(造構はS=1:20、遺物は1:4) .....	17
第17図	5区出土遺物実測図①(S=1:3) .....	18
第18図	5区出土遺物実測図②(S=1:1) .....	18
第19図	5区出土遺物実測図③(S=1:3) .....	19
第20図	出土瓦(軒丸瓦・丸瓦)実測図(S=1:4) .....	20
第21図	出土瓦(平瓦)実測図(S=1:4) .....	21
第22図	4区試料採取地点及び南壁断面図・試料採取位置 .....	25
第23図	5区試料採取地点及び西壁断面図・試料採取位置 .....	25
第24図	4区の花粉ダイアグラム .....	26
第25図	5区の花粉ダイアグラム .....	28
第26図	5区の植物珪酸体ダイアグラム .....	28

## 表 目 次

表1	遺物観察表 .....	23
表2	遺物観察表 .....	24
表3	同定対象分類群と対応植物の関係 .....	26

## 写 真 図 版 目 次

図版1	1. 神門寺付近遺跡遠景(北から) 2. 神門寺付近遺跡遠景(南から)	図版7	1. 壕出土状況(東から) 2. 壕出土状況(南東から)
図版2	1. 調査前全景(4区・5区)南から 2. 調査前全景(5区) 3. 調査前全景(4区) 4. 4区遺物出土状況(東から)	図版8	1. 4区出土遺物 2. 5区柱穴(SP01・03)出土遺物 3～5. SX01出土遺物
図版3	1. 柱穴検出状況(北から) 2. 柱穴検出状況(東から)	図版9	1～7. 5区造構外出土遺物
図版4	1. 墓壙遺物検出状況(東から) 2. 墓壙遺物検出状況(北から)	図版10	1. 柱穴(SP10・11)出土瓦
図版5	1. 墓壙完掘状況(東から) 2. SK01完掘状況(西から)	図版11	1～3. 5区出土瓦(軒丸瓦・丸瓦)
図版6	1. 柱穴検出状況(北東から) 2. 柱穴(SP10)内遺物出土状況(東から) 3. 柱穴(SP11)内遺物検出状況(東から)	図版12	1. 5区出土瓦(丸瓦) 2. 5区出土瓦(平瓦)
		図版13	1. 5区出土瓦(平瓦) 2. 5区出土陶磁器 3. SK01出土遺物

## 第1章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

出雲市が計画する医大前新町線道路改良工事は、その事業区域が神門寺付近遺跡の範囲内であることから、文化財保護法第94条に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事の通知が、出雲市都市整備部街路課から島根県教育委員会へ、平成20年（2008）3月に提出された。

出雲市教育委員会は、街路課から事前の発掘調査の依頼を受け、平成21年（2009）9月25日から平成22年（2010）1月15日まで現地での調査を実施した。

### 第2節 過去の調査

神門寺の境内は、神門寺境内廃寺として昭和35年（1960）12月に出雲市指定文化財（史跡）に指定されている。神門寺境内廃寺は、昭和57年（1982）から昭和59年（1984）の3カ年にわたり国庫補助事業によって発掘調査が実施され（昭和58年（1983）～昭和60年（1985）報告書刊行済），この調査では、溝や基壇を確認し、瓦が出土している。

神門寺付近遺跡は、神門寺の周囲に広がる遺跡で、医大前新町線道路改良工事に伴い、平成20年度に発掘調査を実施している（平成21年（2009）『神門寺付近遺跡I』として刊行済）。

#### 神門寺境内廃寺の調査（第1回）

- ・昭和57年（1次調査） 地形測量、トレーナー調査5箇所（T1～T5）。

第5トレーナーから大溝検出、江戸時代の古絵図にある大溝と推定。

- ・昭和58年（2次調査） ポーリング調査20箇所、トレーナー調査7箇所（T6～T12）。

トレーナー調査で寺院遺構は検出されず、ポーリング調査でも大溝の存在は確認できず。

- ・昭和59年（3次調査） トレーナー調査6箇所（T13～T18）。

本堂北側の土壘は江戸時代の築造と判明。庫裡北側の礎石下に版築された基壇を確認。

#### 神門寺付近遺跡の調査（第1回）

- ・平成20年 道路改良工事部分 120 m<sup>2</sup>を調査。

溝状の遺構、土手状の遺構を検出。丸・平瓦及び陶磁器が出土。

#### 遺構について

神門寺境内廃寺1次調査での大溝の検出は、江戸時代の古絵図にある溝ではないかと推定されている。また、3次調査では、礎石下で版築された基壇が検出され、礎石が原位置を保ったままであることが明らかになった。平成20年度の神門寺付近遺跡調査で検出した、東西に軸をとる溝状遺構・土手状遺構は、時期が不明であり、その性格ははっきりしない。

これまでの調査から、寺城は現在の神門寺境内の北東部を中心としていると考えられるが、その広がりや伽藍配置の詳細については明らかになっていない。

### 瓦について

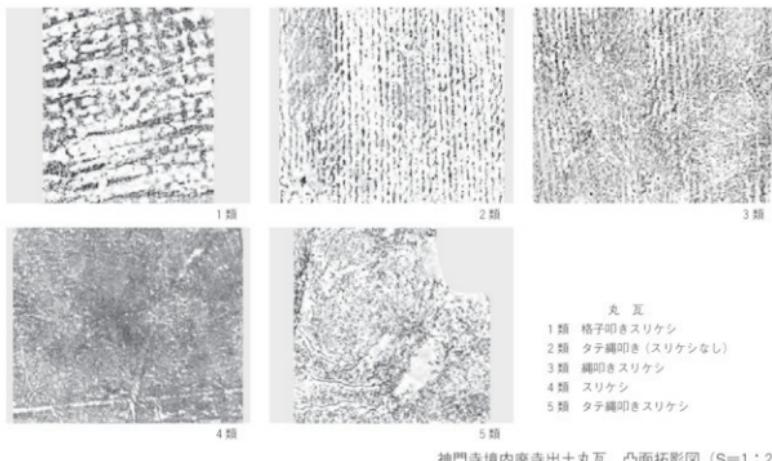
平成20年度調査までに出土した遺物は、土師器・須恵器・瓦・陶磁器が出土している。

瓦のうち軒丸瓦は3種類、このうち複弁文の2種が水切り瓦である。また、丸瓦・平瓦については、それぞれ数種類のタイプが出土している。凸面の調整等から、丸瓦は5類に、平瓦は7類に分類している。(第2図参照)

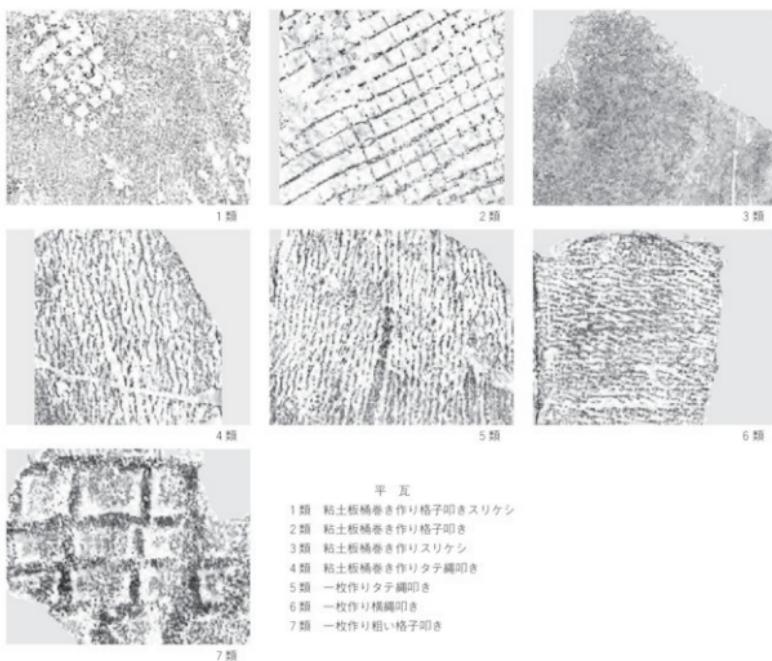
### 調査に関係する主な文書

- 平成20年（2008） 3月18日「埋蔵文化財発掘の通知について」 出雲市街路課から（市教委）県教委へ  
4月1日「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」  
県教委から（市教委）出雲市街路課へ
- 平成21年（2009） 9月16日「埋蔵文化財発掘調査の通知について」 市教委から県教委へ
- 平成22年（2010） 1月21日「医大前新町線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査の概報の提出について」市教委から県教委へ  
1月21日「医大前新町線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて  
(協議)」 市教委から県教委へ
- 平成22年（2010） 1月21日「埋蔵物発見届」市教委から出雲警察署へ  
1月21日「埋蔵物保管証」市教委から県教委へ  
1月22日「遺跡の取り扱いについて（回答）」県教委から市教委へ  
1月26日「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」県教委から市教委へ





神門寺境内廃寺出土丸瓦 凸面拓影図 ( $S=1:2$ )



神門寺境内廃寺出土平瓦 凸面拓影図 ( $S=1:2$ )  
第2図 神門寺境内廃寺出土瓦拓影図（上：丸瓦、下：平瓦）

## 第2章 遺跡の位置と環境

出雲平野は中国山地から流れる斐伊川と神戸川によって形成された沖積平野で、南北を中国山地と島根半島に挟まれている。東方は宍道湖に、西方は日本海に開けている。

神門寺は出雲平野のほぼ中央、神戸川の右岸の出雲市塩治町に所在し、神門寺の境内は神門寺境内庵寺として市の史跡に指定（昭和35年12月）されている。神門寺付近遺跡はこの神門寺境内庵寺の周囲東西約200m、南北約400mの範囲に及ぶ遺跡である。

出雲平野での遺跡の初現は菱根遺跡、上長浜遺跡、三田谷I・III遺跡、上ヶ谷遺跡、築山遺跡、矢野遺跡等の遺跡が知られている。

弥生時代にもこれらの遺跡は継続して営まれ、弥生時代中期から後期になると、遺跡が著しく増加する。下古志遺跡、天神遺跡などの大規模集落が営まれ、弥生時代後期には、西谷墳墓群として知られる大型の四隅突出型墳丘墓が西谷丘陵に築造されている。

古墳時代になると出雲平野の北側に大寺1号墳、神西湖東側周辺に山地古墳、浅柄II古墳や間谷東古墳といった前期古墳が築造される。塩治地域、神戸川右岸にはこの時期の古墳は知られていない。古墳時代中期の古墳は、池田古墳、大型墳丘を持つ北光寺古墳、西谷15号墳等が確認されている。

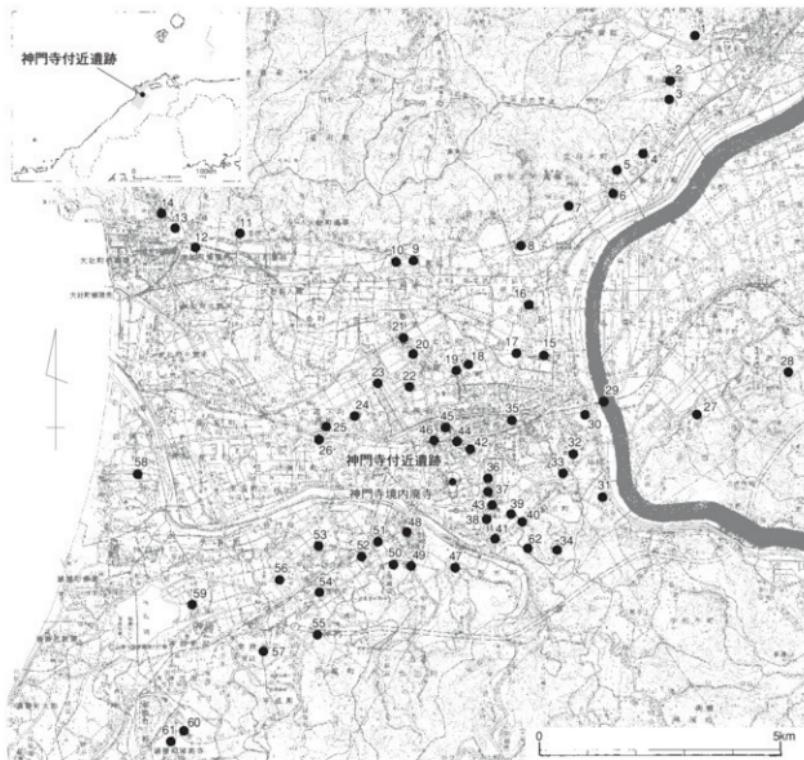
そして、古墳時代後期には古墳の数が増加する。古墳時代前期には古墳がみられなかった神戸川右岸には、島根県下最大級で、出雲西部の首長墓と考えられる今市大念寺古墳が築造される。統いて、次代の首長墓と考えられる上塩治築山古墳が知られ、7世紀に入ると石棺式石室の影響を受けた地蔵山古墳が築造され、上塩治横穴墓群などの横穴墓群が造営されるようになる。

神門寺付近遺跡の周辺について見てみると、天神遺跡、塩治小学校付近遺跡、築山遺跡、角田遺跡、宮松遺跡、古志本郷遺跡、下古志遺跡等多くの遺跡が存在している。これらの遺跡の周辺は、標高7m～9mの微高地となっており、古墳時代後期頃から多くの遺跡が見られるようになる。

神門寺付近遺跡では、これまで古墳時代の遺物がほとんど出土していなかったが、今回の調査で古墳時代前期の大甕が出土したことから、神門寺建立以前にも神門寺の周囲では人々の生活が営まれていたことが確認できた。

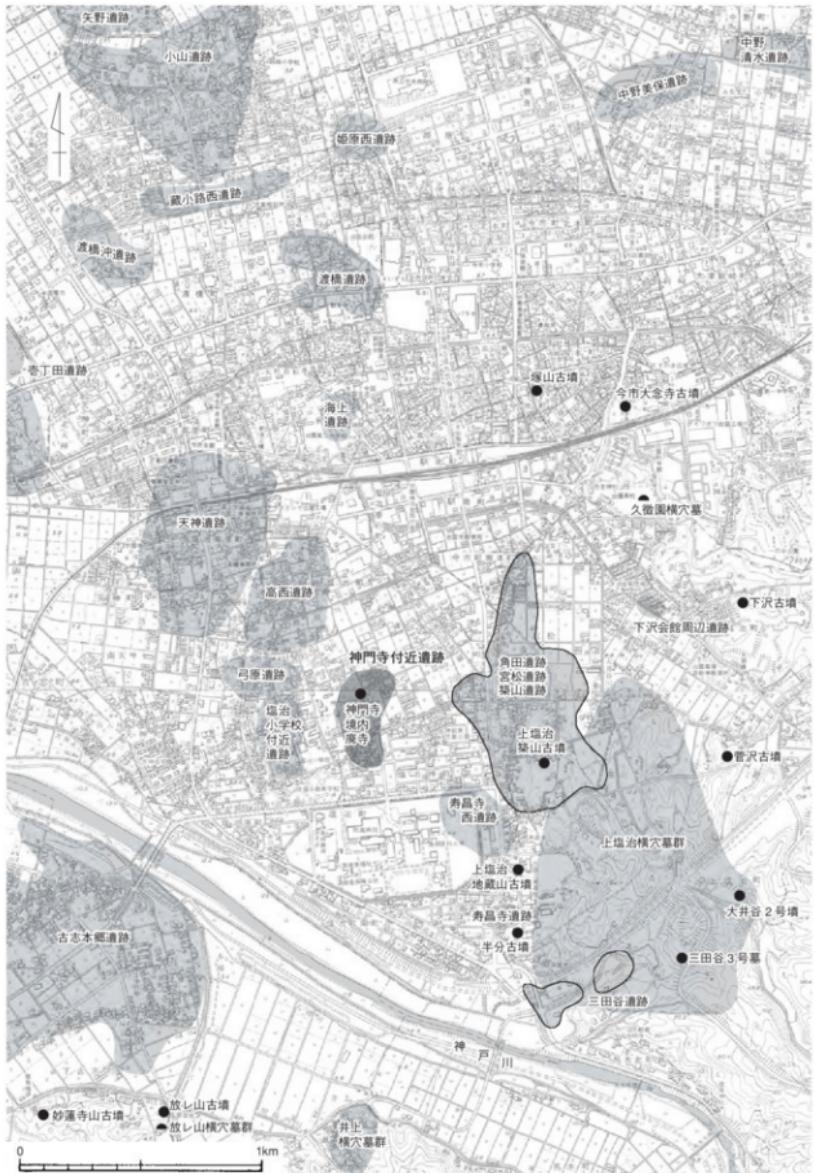
奈良・平安時代の遺跡には、出雲国神門郡家閼連の遺跡と推定される古志本郷遺跡、神門郡の役所跡と考えられる三田谷I遺跡、掘立柱建物跡が検出された天神遺跡、大型倉庫群が検出された後谷遺跡などがある。

神門寺は、「雲陽誌」に「天応元年に建立、故に天應山という」と記述のある寺である。神門寺境内庵寺は出雲平野で最古の寺院と考えられ、神門郡朝山郷新造院にあてる説もある。仏教関連遺跡としては他に、長者原廃寺、天寺平廃寺などが知られ、出雲平野北部では、新造院のひとつと推定されている西西郷廃寺が存在する。中世の遺跡としては、12世紀後半～15世紀の館跡が確認された藏小路西遺跡、築山遺跡、この他に、渡橋沖遺跡、矢野遺跡、下古志遺跡等が存在する。



第3図 神門寺付近遺跡と出雲平野の主要遺跡 (S=1:100,000)

1. 西西郷廃寺
2. 中村1号墳
3. 上島古墳
4. 美談神社2号墳
5. 大寺古墳
6. 青木遺跡
7. 門前遺跡
8. 山持遺跡
9. 里方八方原遺跡
10. 高浜II遺跡
11. 姜根遺跡
12. 原山遺跡
13. 五反配遺跡
14. 出雲大社境内遺跡
15. 中野清水遺跡
16. 萩籽古墓
17. 中野美保遺跡
18. 姫原西遺跡
19. 蔵小路西遺跡
20. 小山遺跡
21. 矢野遺跡
22. 渡橋沖遺跡
23. 白枝荒神遺跡
24. 老丁田遺跡
25. 白枝本郷遺跡
26. 余小路遺跡
27. 後谷遺跡
28. 三井II遺跡
29. 斐伊川鉄橋遺跡
30. 石土手遺跡
31. 権現山古墳
32. 西谷墳墓群
33. 長者原廃寺
34. 大井谷II遺跡
35. 今市大念寺遺跡
36. 角田遺跡
37. 上塙治築山古墳
38. 上塙治地藏山古墳
39. 池田古墳
40. 上塙治横穴墓群
41. 三田谷I遺跡
42. 藤ヶ森南遺跡
43. 菊山古墳
44. 善行寺遺跡
45. 海山遺跡
46. 天神遺跡
47. 井上横穴墓羣
48. 古志本郷遺跡
49. 放レ山古墳
50. 妙蓮寺山古墳
51. 下古志遺跡
52. 宝塚古墳
53. 多聞院遺跡
54. 浅柄遺跡
55. 保知石遺跡
56. 神門横穴墓羣
57. 北光寺古墳
58. 上長浜貝塚
59. 山地古墳
60. 三部竹崎遺跡
61. 御領田遺跡
62. 光明寺3号墓



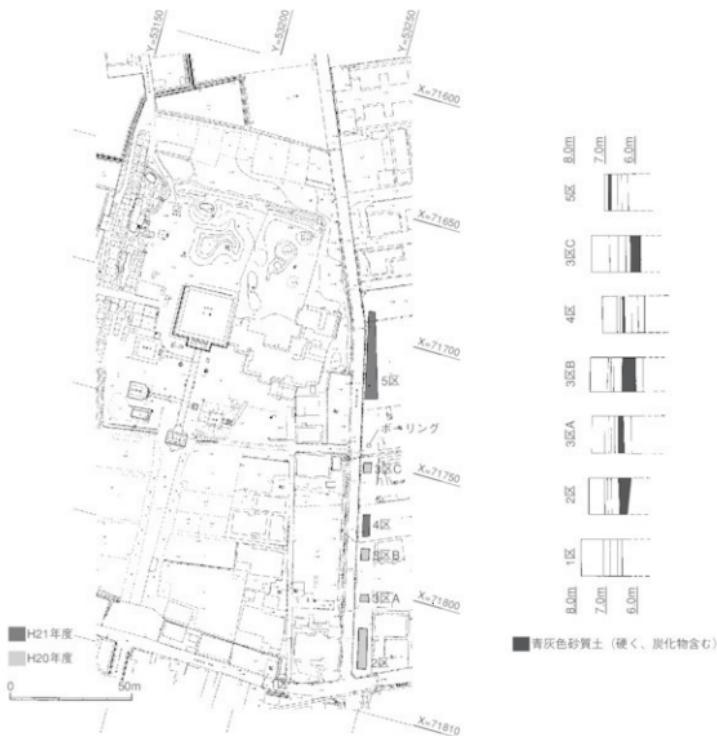
第4図 神門寺付近遺跡周辺の遺跡 (S=1:20,000)

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

調査地は、道路改良工事予定地内の田面である。南北2箇所に分けて調査を実施した。平成20年度の調査では1区、2区、3区(A・B・C)と調査区を分けた。本年度は、南側の調査区(30m<sup>2</sup>)を4区、北側調査区(200m<sup>2</sup>)を5区と呼称する。(第5図)。

平成20年度の調査結果から、調査区全体にわたって、炭化物を含んだ青灰色砂質土(やや硬い)が耕作土下に堆積し、その下には有機物を多く含んだ軟質の暗灰色粘質土が堆積していることが分かっている。遺構は検出できなかったものの、青灰色砂質土(やや硬い)は遺物包含層であり、この堆積状況は水平に安定した土層であった。



第5図 調査区位置図 (S=1:2,000) 及び土層堆積柱状図 (模式図)

本年度は、青灰色砂質土を4区・5区で検出し、有機物を多く含む暗灰色粘質土は4区・5区とも検出できなかった。5区では、青灰色砂質土で遺構を検出した。

なお、昨年度の調査結果及び土層堆積状況の検討と併せ、花粉・植物珪酸体分析を実施した（第4章参照）。

## 第2節 4区の調査（第5・6図、図版2・8）

4区は平成20年度の調査3区-Bと3区-Cの間に位置する。調査面積が限られたため、トレングリフ状に掘削し調査を行った。

### 1. 基本層序（第5図）

土層は表土（耕作土・床土）以下、青灰色粘質土（2層）、やや硬い青灰色粘質土（3層）、炭化物を含む青灰色粘質土（4層）、明青灰色粘質土：砂粒含む（5層）が堆積していた。昨年度の2~3区の調査で確認した、やや硬い青灰色粘質土は同様に標高約6.5mで確認したが、その下の有機物を多く含む暗灰色粘質土は確認できなかった。また、遺構は検出できなかったが、遺物は第2層、4層及び5層の青灰色粘質土から陶磁器類及び木製品が出土した。

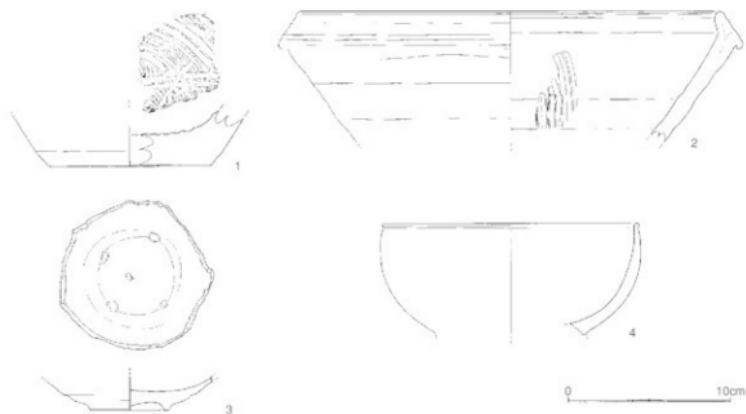
### 2. 出土遺物（第6図、図版8）

出土遺物は、陶器、木製品であった。

1は、擂鉢である。推定底径は10cm、6条のハケメ原体による擂り痕が内面に残っている。室町時代前半頃のものである。5層出土。

2は、備前焼の擂鉢である。口縁端部は内傾し、内面はハケメ痕が残っている。

3は、17世紀初期頃の唐津焼の皿である。内面には釉が施され、見込みに5箇所の目跡が見られる。



第6図 4区出土遺物実測図 (S=1:3)

2層出土。

4は、木製の椀である。内外面共に漆が塗布されていた。黒漆塗布後に赤漆を塗っている。口縁はわずかに外反する。室町時代のものであると考えられる。4層出土。このほか、細片であるが龍泉窯の青磁、陶胎染付の碗、白磁もわずかながら出土した。



第7図 5区土層堆積状況及び遺構配置図①（左は2層柱穴、3層基壙、右は3層ピット）（S=1:200）

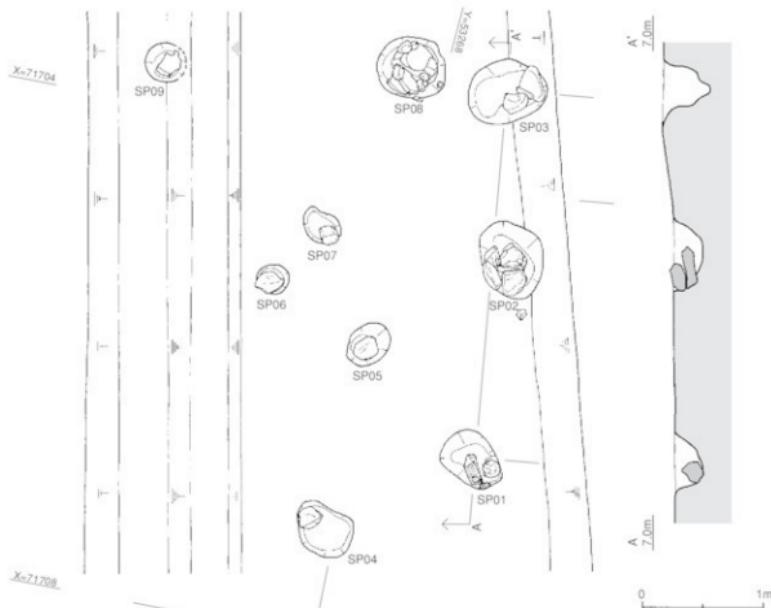
### 第3節 5区の調査 (第7~21図、図版3~7・9~13、巻頭図版)

神門寺東側、南北約40m、東西3~6mの約230m<sup>2</sup>の調査区である。

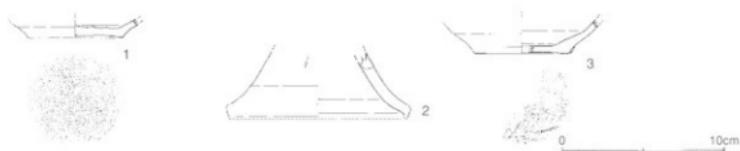
#### 1. 基本層序 (第7図)

基本層序は、耕作土(1層)以下、青灰色砂質土(2層)、灰褐色粘質土(3層)、褐灰色粘質土(4層)、綠灰色砂質土(5層)、綠灰色粘質土(6層)である。2層で柱穴群を検出し、3層で墓壙・ピット群を検出した。

また、4層で土坑・ピット、6層では、土師器壺を入れた土坑を確認した。



第8図 柱穴実測図 (S=1:40)



第9図 柱穴内出土遺物実測図 (S=1:3)

## 2. 2層上面の遺構と遺物

### 柱穴と出土遺物（第8・9図、図版3・8）

柱穴は合計9穴確認した。このうちSP01～SP03は南北一列に並び、建物を構成しているものと考えられる。柱穴間は150cmで、列の向きはE-9°～Nである。柱穴内には石が埋まっており、柱穴内底面に配置されるものと石が立っているものがあった。

SP01は、検出面の掘形が長軸50cm、短軸40cm、深さ20cmで、暗褐色粘質土が堆積していた。柱穴内には自然石が立った状態で堆積し、底面から土師質土器の壊が出土した。

SP02は、SP01の150cm北側で検出した長軸60cm、短軸50cm、深さ25cmの柱穴である。暗褐色粘質土が堆積していた。遺物は出土しなかった。

SP03は、検出面での掘形が長軸60cm、短軸50cm、東西方向に長軸をとる楕円形である。深さ40cmで、暗褐色粘質土の中に20cmの石がほぼ水平に置かれていた。この中からは須恵器、灯明皿が出土した。須恵器は7世紀頃のものであるが、柱穴内に混入したものと考えられる。

SP01及びSP03からは須恵器、土師質土器の壊、小皿が出土した（第9図）。

1は、SP01から出土した土師質土器の壊底部である。底径5.8cm。底部外面は回転糸きり、内面は指による強いナデの痕跡が認められる。

2はSP03の堆積土から出土した須恵器の高壊脚部である。底径は11cm程度と思われる。端部から3cm上にわずかに透かしが確認できる。時期は7世紀頃と思われるが、混入であろう。

3はSP03の底から出土した灯明皿である。底径5.8cm、底面と体部には煤が付着している。

### 3. 遺構（3層）と遺物

#### 墓壙（SX01）と出土遺物（第10・11図）

第3層から検出した東西に長い墓壙で、長軸200cm以上、短軸200cmを測る。検出面からの深さ42cmあり、オリーヴ黒色粘質土（炭混入）が堆積していた。西端は調査区外であったため、全長を確認できなかった。墓壙からは短刀、かわらけ、瓦が出土した。短刀は墓壙の側面に沿うようにほぼ水平な状態で出土した。

土師質土器の小皿は4点ある（第11図、図版8-4）。1は口径7.4cm、器高1.5cm、底径4.2cm、口縁は外傾する。2は口径7.5cm、器高1.7cm、底径1.7cm、3は口径8.0cm、器高1.9、底径4.4cm、4は口径7.8cm、器高2.0cm、底径4.3cmを測る。3、4は口縁端部を丸く收める。13世紀頃のものである。

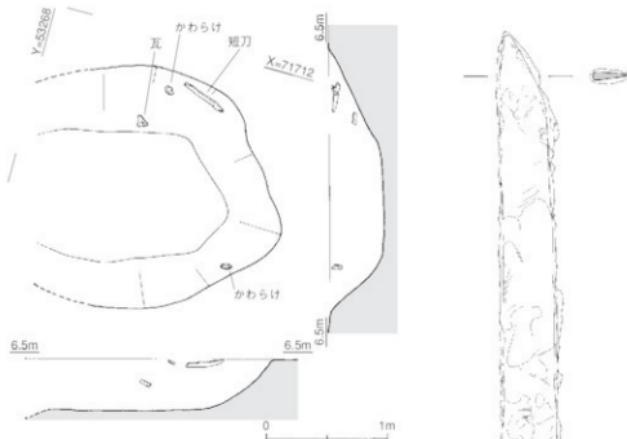
5は短刀である（図版8-3）。両刃で、刀身の背側の間がやや狭い。全長38.5cm、茎長11.5cm、刃部は幅3.2cm、厚さ0.8cmを測る。茎は断面不明である。茎の中央部よりも刃部に近い位置に直径0.6cmの目釘穴が認められる。茎部には木質がわずかに残っている。

6は平瓦である（図版8-5）。一枚作りで、凹面には布目痕、凸面には横縄叩きが確認できる。神門寺境内廐寺出土平瓦の6類に該当する。

## 4. 遺構（4層）について

土坑 SK 01 (第12・13図, 図版5-2)

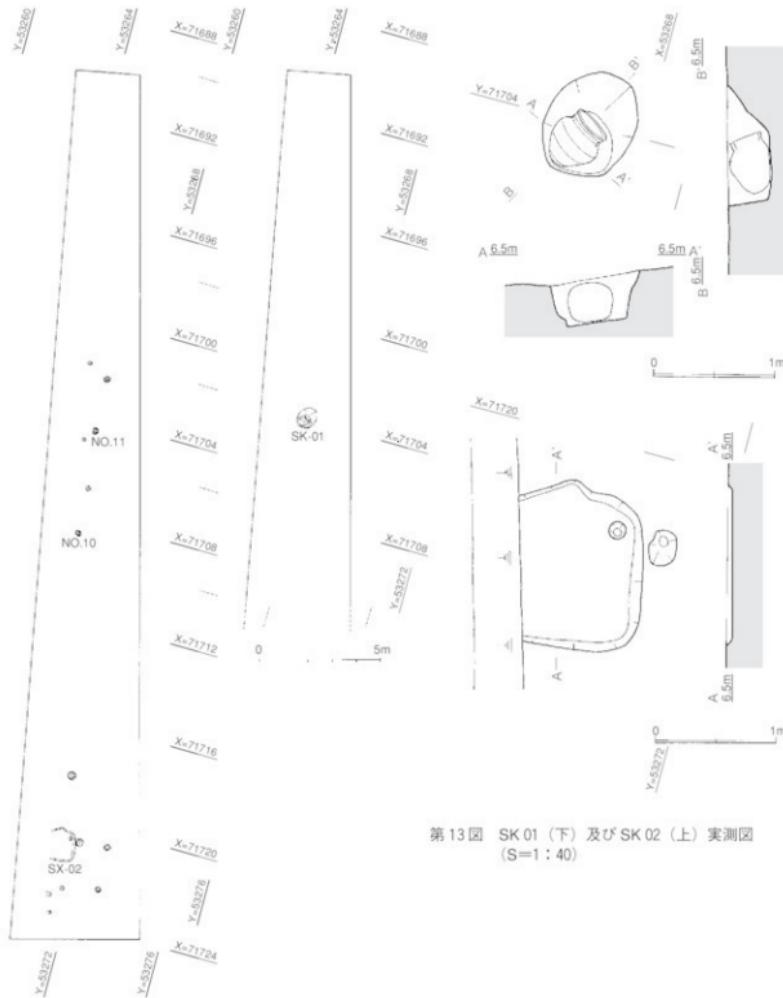
北側調査区内の南, 4層で検出した土壙である。南北の長軸 138 cm, 東西の短軸 100 cm 以上を測る。遺構西側は調査に伴う排水溝で, さらに西側へ遺構が続くと思われる。削平を受けたものと思われ, 深さは残存で 5 cm, 青灰褐色粘質土が堆積しており, 遺構に伴う遺物は出土しなかった。



第10図 墓壙 SX 01 実測図 (S=1:40)



第11図 墓壙 SX 01 出土遺物実測図 (S=1:3)



第13図 SK 01(下) 及び SK 02(上) 実測図  
(S=1:40)

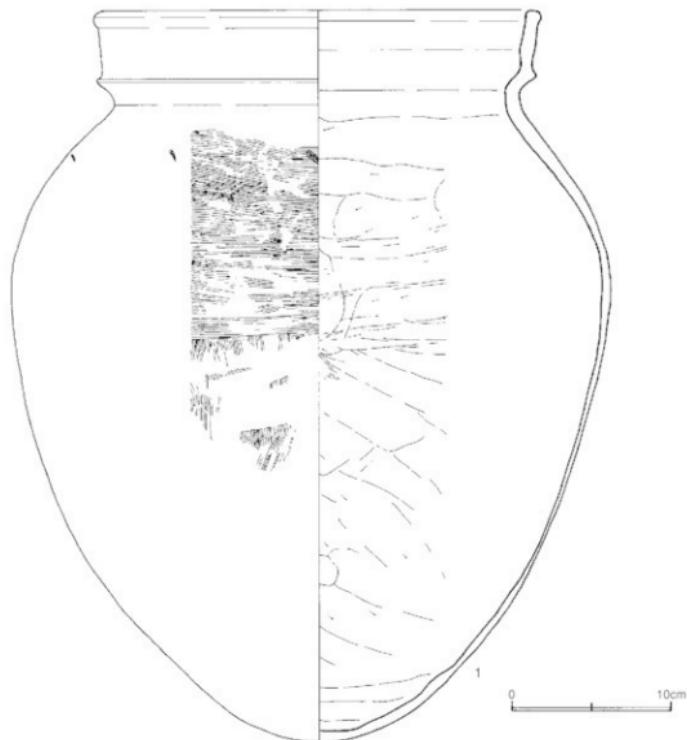
第12図 5区構造配置図②  
(左は4層、右は6層) (S=1:200)

## 5. 遺構（6層）について

### 土坑 SK 02 と出土遺物（第12~14図、図版7・13、巻頭図版）

第6層の緑灰色粘質土層で検出した土坑である。大型の壺が出土した。検出面での掘形は長軸94cm、短軸73cm、深さは35cmを測る。砂粒を多く含む青灰色粘質土が堆積していた。壺は口縁部は横を向け、N-33-Eに軸をとっていた。壺内部には土砂が流入していたが、遺物等は認められなかった。

出土したのは完形の古墳時代前期壺である（第14図）。口径28cm、器高45.6cmを測り、底部はほぼ丸底である。口縁部は「く」の字に立ち上がり外傾する。頸部の上部は外面に突出し、口縁端部はナデにより平坦面となりやや外面に肥厚している。最大径は肩部にあり、38.6cmを測る。外面はハケメ、肩部には刺突文が周囲8箇所施されている。外面の調整は、胴部の中央から上はヨコ方向の



第14図 土坑SK 02 出土遺物実測図 ( $S=1:3$ )

ハケメ、胴部の中央から下には縱方向のハケメである。外面底部付近は丁寧なナデ調整となっている。内面は、ヘラケズリ調整である。器壁は口縁部・頸部付近で最大1cmを測るが、体部の最も薄い部分では0.2cmである。草田5~6期のものである。

#### 6. 遺構(5層)柱穴 (SP10, SP11) 及び出土遺物 (第15図・16図)

柱穴SP10は第5層上面で検出した直径25cm、深さ37cmを測る柱穴である。埋土の青褐色灰色砂質土から平瓦3枚(1~3)と石が出土した。上から平瓦1・石・平瓦2・平瓦3の順に重なった状態で出土した。瓦は北側をやや高くしていたがほぼ水平に据えられていた。

平瓦はいずれも破片である。凸面の調整は、平瓦1が桶巻き作り格子叩き(神門寺境内廃寺2類)、平瓦2・3は一枚作りタテ繩叩き(神門寺境内廃寺5類)である。2・3は、断面にも煤が付着しており、二次焼成を受けている。

柱穴SP11も同じく第5層上面で検出した柱穴。直径30cm、深さは33cmで、埋土の青褐色灰色粘質土から平瓦が2枚出土した。ともに一枚作りタテ繩叩き(神門寺境内廃寺5類)である。二枚のうち上になっていた瓦は須恵質であった。

#### 7. 包含層の出土遺物 (第17~21図、図版11~13)

遺構に伴わない包含層の出土遺物は、土師器、土師質土器、須恵器、陶磁器、木製品、瓦類等であった。主に3層出土土製品(第17図、図版9)

1・2は古墳時代前期の土師器で、共に調査区東側の排水溝から出土した。1は複合口縁となる壺の口縁部である。2は低脚壺の脚部である。底径は推定6.6cmで、脚部は「ハ」の字に開き、端部は丸く收めている。壺部と脚部の接合部にはハケメが残っている。わずかながら脚部に1箇所穿孔の痕跡が確認できる。

3・4は須恵器の高台付き壺で、共に第3層から出土した。3は、底径推定7.6cmで、高台部は短く「ハ」の字に開き、端部は平坦になっている。壺部底部外面には回転糸引き痕が残っている。4は、底径8.8cm。高台部は「ハ」の字に開き、端部は外面を向き平坦になっている。壺部底面には1条の凹線が円形に廻っている。12世紀頃のものと考えられる。

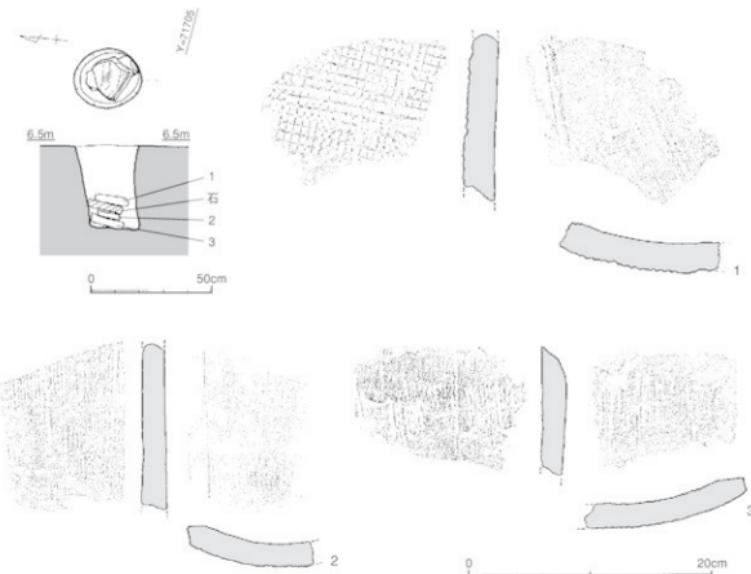
5は、土師質土器の壺である。調査区東側排水溝から出土した。底径4.8cm、底部外面には回転糸引き痕が残る。

6・7は、第3層で出土した土師質土器の高台付壺である。6の上に7が伏せられた状態で出土した。6は、高台径7.9cm、高台の高さ1cm。壺部と脚部の境は突帯状に肥厚している。7は、口径14.4cm、器高4.9cm、高台径9.2cm。高台は「ハ」の字に開き、高さ1.5cm、端部は丸く收めている。壺底部外面にはヘラによる「×」の印がある。壺部と脚部の境は器壁がわずかに肥厚している。

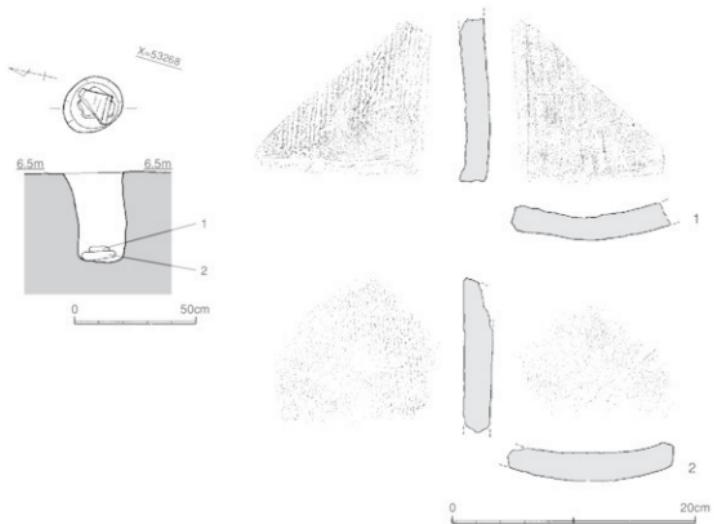
8は、第3層から出土した常滑焼の壺の口縁部破片である。内外面に釉がかかる。平安時代末頃。

9・10は、第3層から出土した捏鉢の口縁部である。9は、口縁端部が平坦で、わずかに凹線状にくぼみを持つ。体部はハケメ調整である。10は、注口のある捏鉢である。口縁端部は丸收め、外面が突帯状に厚く肥大している。体部はハケメ調整である。

11・12は第3層から出土した管状の土錐である。共に長さは約4cm、最大径は約1cm。



第15図 柱穴（SP 11）実測図及び出土瓦実測図①（遺構は S=1:20, 遺物は 1:4）



第16図 柱穴（SP 10）実測図及び出土瓦実測図②（遺構は S=1:20, 遺物は 1:4）

**古銭** (第18図、図版9-4)

1は祥符通寶(北宋、初鑄年1009年)である。直径15cm、深さ7cmの小土坑から銭面を下にして出土した(第7図参照)。地鎮にかかる銭である可能性がある。

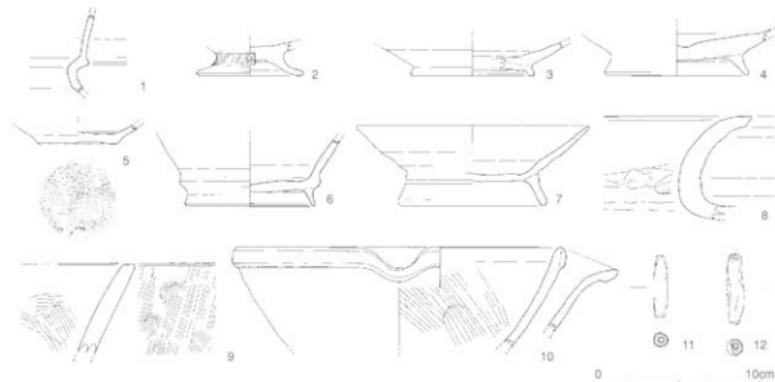
2は開元通寶(唐、初鑄年621年)である。背面には文様があるが摩滅により不明である。4層出土。

**緑灰色粘質土層の出土の土器と木器** (第19図、図版9-6・7)

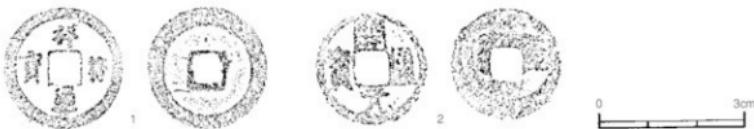
1~3は土師質土器の壺である。1は口径12cm、器高4.7cm、底径4.0cm。体部は緩やかに内湾して立ち上がり、器壁は薄い。底部は回転糸きりである。2は口径11.8cm、器高3.9cm、底径4.5cm。底部からの立ち上がりはやや内湾するものの比較的直線的である。3は口径推定12.4cm、器高4.6cm、底径推定55.0cm。器壁は薄く、底部から逆「ハ」の字状に直線的に立ち上がる。底部周辺を強く絞り、体部との境に段を有する。いずれも13世紀頃のものと考えられる。

4は捏鉢の底部である。体部外面はハケメ調整、内面はナデ調整である。底径は推定14.0cmである。

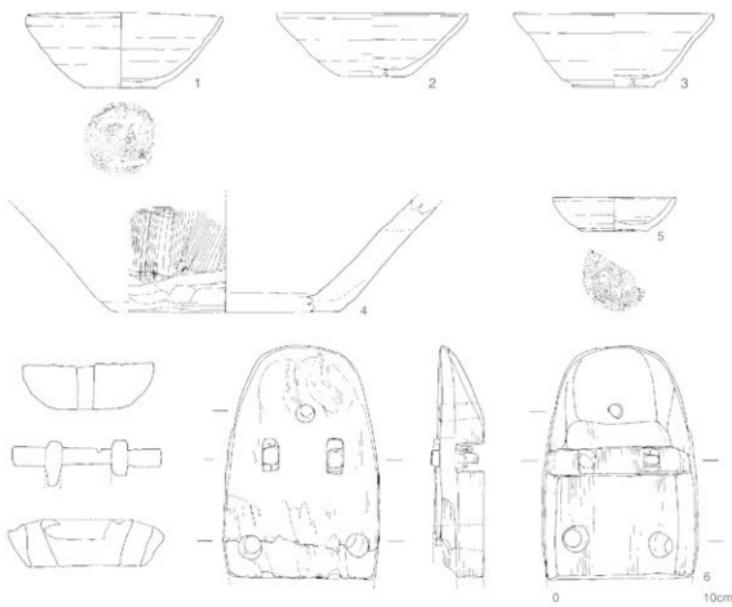
5は土師質土器の小皿である。口径7.6cm、器高2.1cm、底径4.2cmである。緩やかに内湾し口縁端部は丸く收める。



第17図 5区出土遺物実測図① (S=1:3)



第18図 5区出土遺物実測図② (S=1:1)



第19図 5区出土遺物実測図③ (S=1:3)

6は、長梢円形の下駄である。残存長14.3cm、最大幅9.5cm、厚さ3.0cm。前歯は欠けているが楔が2箇所に残存している。台部は断面が逆台形で、台の表には緒穴の先に圧痕が見られる。

#### 瓦 (第20・21図、図版11~13-1)

1~3は軒丸瓦である。

1は、複弁八弁蓮華文軒丸瓦の神門寺境内廐寺1類である。蓮弁は弁端が丸く、子葉には細い輪郭線がある。径約6cmの中房に1+4の蓮子をおく。外区には二重の圓線(幅0.7cm)がめぐり、周縁部は幅1.0~1.4cmの平縁である。瓦当の下端が尖ることから「水切瓦」と呼ばれるものだが、その部分は欠損している。瓦当直径は、推定約18cm、厚さは最大で2.8cm。蓮弁は長さ・幅とも3cm。

瓦当裏面は平坦で、ナデ調整のあと、一部に叩きを加えているようである。瓦当裏面上端には、丸瓦接合痕跡がある。浅い接合溝を付けたのち、瓦当部に放射状と弧状の刻み目を入れて接合している。丸瓦部広端の加工状況および刻み目の有無は、よくわからない。丸瓦内外面にあてられる接合粘土は少量である。側面には范端の痕跡があり、範はほとんど側面にかぶらない。カセ型の圧痕と思われる木目痕もみえる。焼成は良く、須恵質で、一部に自然釉が認められる。

2は、軒丸瓦の破片で、花弁の弁端から先が一部残存している。周縁側面が直線的に伸び周縁部の



第20図 出土瓦（軒丸瓦・丸瓦）実測図 ( $S=1:4$ )

第21図 出土瓦（平瓦）実測図 ( $S=1:4$ )

幅が広がることから考えて、水切瓦であると考えられる。

3は、軒丸瓦の接合部片で、内面には接合の際の強い指ナデの跡が残されている。外面はナデによる仕上げが施されている。

4~10は丸瓦である。残存長は6cm~16cm程の破片で、4~6は、凸面調整が格子叩きスリケシ(神門寺境内庵寺丸瓦分類1類)。4・5は土師質、6は須恵質である。6は凸面のスリケシ後、ハケ状の工具痕が認められた。7・8は凸面調整がスリケシ(4類)で、7は端部が凹面に巻き上がっている。9・10は玉縁式である。

平瓦(第21図)は、1類から7類のうち3・4類以外の種類が出土した。1は凸面格子叩きスリケシ調整(1類)、2は格子叩き調整(2類)である。3~5は一枚作りタテ繩叩き(5類)である。3は須恵質、4・5は土師質である。6は一枚作り凸面横繩叩き(6類)、7は一枚作り凸面粗い格子叩き(7類)である。

#### 【参考文献】

- |            |  |
|------------|--|
| 三次市教育委員会   | 1982 「備後寺町庵寺」—推定三谷寺跡第3次発掘調査概報—                       |
| 出雲市教育委員会   | 1985 「神門寺境内庵寺」                                       |
| 川原和人・桑原真治  | 1987 「鳥根県斐川町西石橋遺跡の中世墓」『九州古文化研究会』                     |
| 島根県教育委員会   | 1999 「斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書V 三田谷I遺跡」                |
| 島根県教育委員会   | 1999 「一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2 蔵小路西遺跡」        |
| 島根県教育委員会   | 2002 「来美庵寺「山代郷新造院」推定地発掘調査報告書」                        |
| 島根県教育委員会   | 2004 「風土記の丘地内遺跡発掘調査X」<br>—鳥根県松江市山代町所在・山代郷南新造院(四王寺)跡— |
| 島根県教育委員会   | 2007 「山代郷北新造院跡 史跡出雲国山代郷遺跡群北新造院跡(来美庵寺)発掘調査報告書」        |
| 島根県教育委員会   | 2008 「一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I 九景川遺跡」         |
| 出雲塙治誌刊行委員会 | 2009 「出雲塙治誌」   |
| 出雲市教育委員会   | 2009 「県道出雲三刀屋線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 柴山遺跡Ⅲ」               |

表1 遺物観察表

器種	出土位置	器種	口径cm	器高cm	底径cm	調整	胎土/焼成	色調	備考
6・1	5層 土師質 擂鉢底部片				10.0	外面 ケズリ後ヨコナデ 内面 ヨコナデ後 強いハケ目(留り目)	胎土 密 焼成 普通	外面 灰白色～灰黃褐色 内面 灰白色～灰黃褐色 胎土 灰白色～浅灰褐色	4区 南北朝以降、室町前半
6・2	4層 撫前焼 擂鉢口縁～胴部		26.0			外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	胎土 少し粗 焼成 良	外面 灰色～褐色 内面 黒色～褐色 胎土 ぶい赤褐色	4区
6・3	2層 唐津窯 底部片				5.0	ろくろ 回転ヘラ ケズリ	胎土 普通 焼成 良	外・内面 灰白色(釉薬) 一擦色(胎土・露胎)	4区 17世紀初め 見込みは5ヶ所の目路
6・4	4層 木製品 植 口 縁～体部片		15.8			成形後塗漆り		黒漆 黒色 赤漆 赤褐色	4区 黒漆塗布後に 赤漆を塗る
9・1	SP 01 坏 底部片				5.8	同転ナデ 回転系 切り	胎土 普通 焼成 普通	外面 灰白色 内面 灰白色	
9・2	SP 03 須恵器 高輪脚部片				11.0	同転ナデ ヨコナ デ	胎土 普通 焼成 普通	外面 灰色 内面 灰色～灰黃褐色	スカシ有り
9・3	SP 03 灯明皿 底部片				5.8	同転ナデ 回転系 切り	胎土 密 焼成 普通	外面 黒褐色～ぶい黄 褐色 内面 黒褐色～ 灰黃褐色～黑色 胎土 黒褐色	内面に黒い付着物 (スヌ)
11・1	SX 01 小皿		7.4	1.5	4.2	同転ナデ 回転 系切り	胎土 普通 焼成 普通	外面 ぶい黄褐色～褐 色 内面 ぶい黄褐色～ 黒褐色	内面に付着物
11・2	SX 01 小皿		7.5	1.7	4.0	同転ナデ ヨコナ デ 回転系切り	胎土 密 焼成 普通	外面 ぶい黄褐色 内面 ぶい黄褐色	
11・3	SX 01 小皿		8.0	1.9	4.4	同転ナデ 回転系 切り	胎土 密 焼成 普通	外面 灰白色～黒色(付 着物) 内面 灰白色～ 灰黃褐色	口縁～体部にスス付 着? 完成品
11・4	SX 01 小皿		7.8	2.0	4.3	同転ナデ 回転系 切り	胎土 密 焼成 少しあ	外面 灰白色 内面 灰白色 胎土 灰白色	完成品
11・5	SX 01 短刀	最長	最巾	厚さ	38.5	3.5 0.7～0.8			柄部に木片付着 全 体にサビが付着
11・6	SX 01 平瓦片 横樋目	最長	最巾	厚さ	8.2	7.4	2.0		平瓦 6類
14	SK 01 大甕		28.0	45.6	2.0	外転ナデ後にタチ ヨコのハケ目、肩 部に刺突文。内面 ヨコケズリ後ナデ	胎土 少し粗 焼成 良	外面 浅黄褐色～灰白色 内面 桜色	重量 約 3.87 kg ほぼ完品 外面は 風化している
15・1	SP 11 平瓦片 2類	最長	最巾	厚さ	13.0	13.0	2.5	格子叩き 布目	焼成後、叩き割り取 り痕がある
15・2	SP 11 平瓦片 5類	最長	最巾	厚さ	13.6	10.4	2.9	網目 布目	外面 灰白色～灰黃褐色 内面 灰色～灰黃褐色～ 黒褐色
15・3	SP 11 平瓦片	最長	最巾	厚さ	10.5	13.4	1.9	網目 スリケシ	外面 黄褐色～灰黃褐色 内面 ぶい黄褐色～黒褐色 胎土 ぶい桜色
16・1	SP 10 平瓦片	最長	最巾	厚さ	13.3	13.1	2.0	網目 布目	外面 灰色 内面 オリーブ黒色 胎土 灰色
16・2	SP 10 平瓦片	最長	最巾	厚さ	12.7	13.6	2.3	網目 布目	外面 ぶい桜色～灰白 色 内面 灰白色
17・1	東側溝中 壺 口縁部片					回転ナデ ヨコナ デ	胎土 普通 焼成 少しあ	外面 灰白色～灰黃褐色 内面 ぶい桜色～灰白色	布の重なり跡が残る
17・2	東側溝中 低脚壺 底部～ 脚柱部片				6.6	回転ナデ ケズリ 後ナデ	胎土 普通 焼成 良	外面 灰白色 内面 灰白色	穿孔あり 脚部と杯 底部をハケ状工具で 接合
17・3	東側3層 暗褐色土 須恵器 錠底部 高台付坏底部～ 体部片				7.6	ヨコナデ 底部ハ ケ状工具で調整	胎土 普通 焼成 普通	外面 灰白色 内面 灰白色	ヨコナデで高台を作 る
17・4	東側3層 暗褐色土 須恵器 壺底部				8.8	回転ナデ 回転ケ ズリ 接合時ヨコ ナデ	胎土 普通 焼成 良	外面 黄褐色～オリーブ 黒色 内面 灰色 胎土 灰白色	杯底部外面、回転ケ ズリ後ナデでから直 径4 cmの円を工具 で削む
17・5	東側溝中 土器器 壺底部				4.8	回転ナデ 回転系 切り	胎土 普通 焼成 普通	外面 明褐色 内面 明褐色～褐灰色	
17・6	3層 高台付坏				7.9	回転ナデ 底面系 切り後高台部接合 時指でタブ	胎土 普通 焼成 良	外面 灰白色～浅黄褐色 内面 浅黄褐色～灰褐色	全体に風化している
17・7	3層 高台付坏		14.4	4.9	9.2	回転ナデ 高台部 接合後指でナデ	胎土 普通 焼成 普通	外面 浅黄褐色～橙色 内面 橙色	外面部、高台接合後 に棒状工具でXを削む
17・8	3層 常滑窯 平安末 口縁～頸部片					ろくろ 回転ナデ 内面部押さえ	胎土 普通 焼成 良	外面部 オリーブ～茶褐 色系の釉がかかる 胎土 灰白色	

表2 遺物観察表

番号	出土位置	器種	口径cm	器高cm	底径cm	調査	胎土/焼成	色調	備考
17・9	3層	こね鉢 口縁部片				外面内面にナメのハケ目	胎土 普通 焼成 少し軟	外面 黄褐色～にぶい黄褐色 内面 黄褐色 胎土 灰色	全体に風化している
17・10	3層	こね鉢 口縁、注ぎ口～胸部片	20.5			外面 ナメのハケ目	胎土 普通 焼成 普通	外・内面 オリーブ黒色～淡赤褐色 胎土 灰白色	全体に風化している 口縁部工具による段差け後ヨコナギ
17・11	3層	管状土錐	最長 3.8	最巾 0.8	高さ 0.8	外面 ナメ	胎土 密 焼成 普通	外面 灰白色 焼き跡 灰色	定形
17・12	3層	管状土錐	最長 4.3	最巾 1.0	高さ 1.0	外面 ナメ	胎土 密 焼成 普通	外面 灰白色	一部欠損
18・1	1層 1	祥符通寶							古錢
18・2	3層上面	開元通寶							古錢
19・1	緑灰色粘質土	坏	12.0	4.7	4.0	回転ナデ 回転糸切り	胎土 普通 焼成 普通	外面 灰白色 内面 灰白色 胎土 灰白色	定形
19・2	緑灰色粘質土	坏	11.8	3.9	4.5	回転ナデ 回転糸切り	胎土 普通 焼成 良	外面 灰白色 内面 灰白色	
19・3	緑灰色粘質土	坏	12.4	4.6	5.0	回転ナデ 回転糸切り ナデで高台部に段差を付ける	胎土 密 焼成 普通	外面 灰白色 黄灰色内面 灰白色 黄褐色土灰白色 付着物(スヌ) 黒褐色	
19・4	緑灰色粘質土	土器飾 捶ね鉢 底部片		14.0		外面ハケ目 (3~5条単位) ハケアズリ後ナデ 内面はヨコナギ	胎土 普通 焼成 良	外面 黄褐色 内面 にぶい黄褐色～褐色	
19・5	緑灰色粘質土	小皿		7.6	2.1	4.2 切り	胎土 普通 焼成 普通	外面 明麗灰色 内面 明麗灰色～灰白色	
19・6	緑灰色粘質土	木製品 下駄	最長 14.3	最巾 9.5	高さ 3.0				下駄の歯は欠損 素掘出しの穴が残る
20・1	3層	軒丸瓦 水切瓦	最長 10.5	最巾 10.5	厚さ 2.9	連弁文	胎土 普通 焼成 良	外面 オリーブ黒色～灰褐色 内面 灰色 胎土 灰色	須恵質復元直径 17.9 cm
20・2	東濃中	水切り瓦片	最長 5.4	最巾 6.8	厚さ 2.3	型で施文	胎土 普通 焼成 普通	外面 にぶい黄褐色 内面 灰黄色 胎土 にぶい橙色	全体に風化している
20・3	3層	軒丸瓦・瓦当頭部片 墓質	最長 9.3	最幅 6.1	厚さ 2.3	ケズリ ナデで接合ケズリ後スリケン	胎土 普通 焼成 良		軒丸瓦・丸瓦部との接合痕が残る
20・4	3層 暗褐色土	丸瓦片 1類	最長 10.3	最巾 8.3	厚さ 1.7	格子叩き後スリケン シヨコナデヨコケズリ	胎土 普通 焼成 良(須恵質)	外・内面 灰色 (少し青みがかっている)	
20・5	2層	丸瓦片 1類	最長 15.7	最巾 13.0	厚さ 2.2	格子叩き後スリケン	胎土 普通 焼成 普通	外面 にぶい黄褐色～灰白色 内面 灰白色 胎土 灰白～浅黄褐色	
20・6	東側溝	丸瓦片 1類	最長 15.2	最巾 6.2	厚さ 1.8	格子叩き後スリケン 外面端にスリケン後ヨコナゲ	胎土 普通 焼成 良	外面 灰色、オリーブ黒色がかる 内面 灰色 胎土 灰白色	
20・7	3層	丸瓦片 4類	最長 6.9	最巾 5.0	厚さ 1.7	スリケン 端部粘	胎土 密 焼成 普通	外・内面 灰色 胎土 灰白色	
20・8	3層	丸瓦片 4類	最長 7.0	最巾 6.0	厚さ 1.7	スリケンヨコナデ	胎土 普通 焼成 普通	外面 灰黄色 内面 灰白色～淡橙色 胎土 灰白色	
20・9	2層	丸瓦片 4類	最長 6.0	最巾 7.2	厚さ 1.8～3.0	ヨコナデ、ハケ状 工具によるタテのハケ目	胎土 普通 焼成 普通	外面 黒色～灰色 内面 オリーブ黒色から灰白色 胎土 灰白色	
20・10	3層(壁内)	丸瓦片 4類	最長 7.0	最巾 6.7	厚さ 1.2～2.7	ナデ	胎土 普通 焼成 普通	外面 明赤褐色 にぶい赤褐色 胎土 橙色	
21・1	3層	平瓦片 1類	最長 11.8	最巾 8.7	厚さ 2.0	シヨコナデ	胎土 普通 焼成 良	外面 黑色～灰色 内面 オリーブ黒色から灰白色 胎土 灰白色	
21・2	3層	平瓦片 2類	最長 12.0	最巾 8.4	厚さ 2.1	格子叩き 布目	胎土 少し粗 焼成 普通	外面 黄褐色～灰黑色 内面 黄褐色～灰黑色	布目は風化が著しくはっきりしない
21・3	3層	平瓦片 5類	最長 9.4	最巾 7.0	厚さ 2.3	綱目 布目、板状 工具で叩いた跡	胎土 普通 焼成 普通	外面 灰色 内面 灰色 にぶい黄褐色～浅黄褐色	
21・4	2層	平瓦片 5類	最長 14.3	最巾 13.0	厚さ 2.4	布目 綱目 ナデ	胎土 普通 焼成 普通	外面 灰白色～灰黄色 内面 灰白色	
21・5	3層	平瓦片 5類	最長 7.1	最巾 11.4	厚さ 2.3	布目 綱目 ナデ	胎土 普通 焼成 普通	外面 灰白色 内面 灰白色 浅黄褐色	
21・6	緑灰色土	平瓦片 6類	最長 8.0	最巾 9.7	厚さ 2.0	ヨコ縦目叩き 布目	胎土 普通 焼成 普通	外面 灰白色～灰黑色 内面 灰白色	
21・7	3層	平瓦片 7類	最長 11.4	最巾 8.0	厚さ 2.3	ヨコ縦目叩き ナデ ケズリ後ナデ	胎土 普通 焼成 良	外面 黄褐色～灰白色 内面 灰白色	瓦端部にナデ後沈締を一本入れる

## 第4章 神門寺付近遺跡発掘調査に伴う 花粉・植物珪酸体分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント（株））

### はじめに

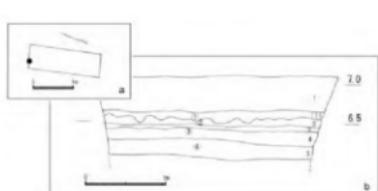
神門寺付近遺跡は島根県東部の出雲市塩治町地内に位置し、出雲平野南部に広がる神戸川扇状地上に立地する。本報は神門寺付近遺跡の発掘調査に伴い、土地利用と周辺地域の古植生を知る目的で、文化財調査コンサルタント株式会社が出雲市（文化企画部文化財課）からの委託を受け実施した調査報告の概報である。

### 分析試料について

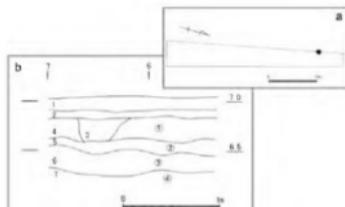
分析試料は、出雲市文化企画部文化財課との協議の上、文化財調査コンサルタント（株）が採取した。図22, 23に各調査区の平面図及び試料採取地点付近の断面図を示す。両図共に、平面図上の[●]が試料採取地点のおおよその位置であり、断面図状の①～④が試料採取位置である。

### 分析方法

花粉分析は渡辺（2010）に従って実施した。花粉化石の観察・同定には光学顕微鏡を用い、通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍で観察した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従つてイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40ミクロン以上）と、イネを含む可能性が低



第22図 4区試料採取地点及び南壁断面図・試料採取位置



第23図 5区試料採取地点及び西壁断面図・試料採取位置

- 1：耕作土 (1) : 床土 2：青灰色粘質土  
3：2が硬くしまっている 4：青灰色粘質土（炭化物含む）  
5：明青灰色粘質土（砂粒含む）

- 1：耕作土 2：青灰色砂質土 (3: 灰色粘質土(炭混じり))  
4：灰褐色粘質土（砂混入） 5：褐色粘質土（鉄分混じる）  
6：綠灰色砂質土（鉄分により部分的に褐色）  
7：綠灰色粘質土（粘性強い）

い小型のイネ科（40ミクロン未満）に細分している。

植物珪酸体分析処理は藤原（1976）のグラスビーズ法に従い実施した。植物珪酸体の観察・同定には光学顕微鏡を用い、通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍で観察した。同定に際して、表1に示す栽培に関連した種類を対象とした。また、植物珪酸体と一緒に計数したグラスビーズの個数が400を超えるまで計数を行った。

表3 同定対象分類群と対応植物の関係

コード	分類群	対応する栽培植物
1	イネ	イネ
3	イネ糊穀（穎の表皮細胞）	イネ
21	ムギ類（穎の表皮細胞）	コムギ・オオムギ
41	オヒシバ属（シコクビエ型）	シコクビエ
61	キビ族型	ヒエ・アワ・キビ
62	キビ属型	キビ
64	ヒエ属型	ヒエ
66	エノコログサ属型	アワ
84	ウシクサ族B	サトウキビ
91	モロコシ属型	モロコシ

（断りのないものは、機動細胞由来の珪酸体）

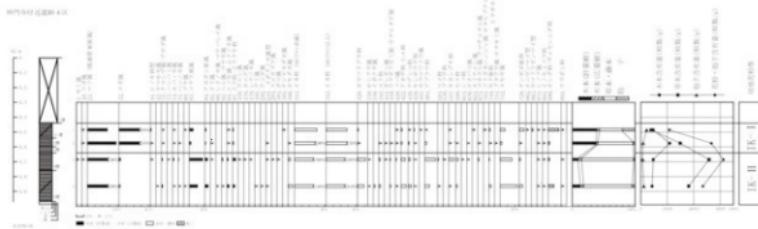
## 分析結果

### 1) 花粉分析結果

分析結果を図24、25の花粉ダイアグラムに示す。各ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として分類群ごとに百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示した。統計処理に十分な量の木本化石が検出できなかった試料では、検出できた種類を「\*」で示した。この右に針葉樹花粉、広葉樹花粉、草本・藤本花粉、胞子の割合を表すダイアグラム、湿潤試料1gあたりの含有量（粒数/g）を表すグラフを示した。

### 2) 植物珪酸体分析結果

分析結果を図26の植物珪酸体ダイアグラムに示す。植物珪酸体ダイアグラムでは、1gあたりの含有量に換算した数を、検出した分類群ごとにスペクトルで示した。



第24図 4区の花粉ダイアグラム

#### 4区の堆積時期の推定（局地花粉帯の設定）

4区で得られた花粉（化石）群集は、上下に2分できた。下部の試料No 4, 3ではマツ属（複維管束亞属）が卓越し、コナラ亜属を伴っている。これに対し、上部の試料No 2, 1ではスギ属、マツ属（複維管束亞属）が共に卓越している。これらのことから、下部をIK-II带（試料No 4, 3）、上部をIK-I带（試料No 2, 1）とする。

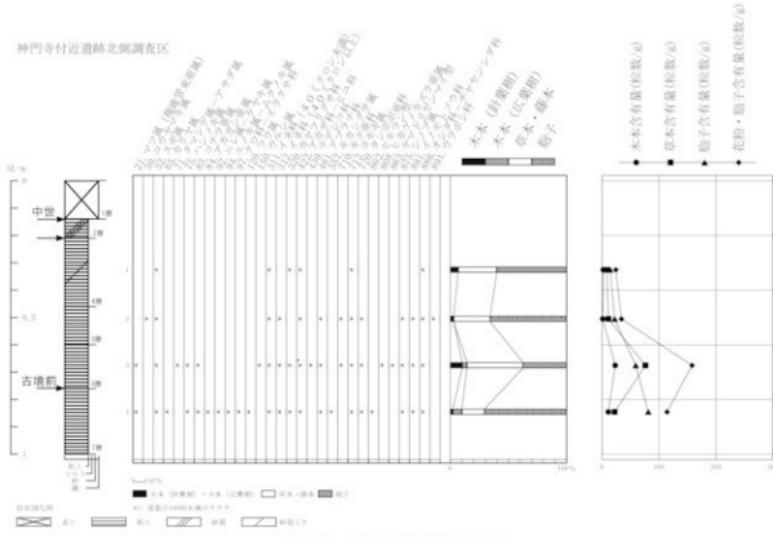
出雲市内では今回のIK-II带のようにマツ属（複維管束亞属）が卓越し、コナラ亜属を伴う花粉群集は、程度の差があるもの近世の堆積物から得られている。また、IK-I带のようにマツ属と（複維管束亞属）とスギ属が卓越する花粉群集は、近代から現代にかけての時期と、弥生時代から中世にかけての時期に認められる。花粉帯の上下関係から判断すると、IK-II带が近世、IK-I带が近代から現代を示すと考えられる。

#### 4区と5区の堆積環境について

一般に水成堆積物では、花粉を分解するバクテリアや紫外線から守るために花粉の保存状態が良く、花粉の含有量が多い（例外的に、洪水成堆積物や粗粒堆積物では、花粉の供給量や堆積物の粒径の関係から含有量が少ない）。一方、陸成生堆積物ではバクテリアの活動が盛んで紫外線の影響も強いことから、花粉の保存状態が悪く、花粉の含有量が少ないことが多い（例外的に、森林土壤では花粉の保存状態が良く、含有量も多い）。また酸化鉄や酸化マンガンなどの検出やグライ化に伴って、堆積物中で花粉が化学的に分解される可能性があり、このような堆積物中では花粉の含有量が極端に少ないことが多い。更に、何らかの要因で乾燥を受けた堆積物中では、花粉粒が収縮し同定不可能になる個体が極めて多い。

4区の花粉分析結果では、イネに由来する可能性が大きいイネ（40ミクロン以上）や水生植物のガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ホシクサ属、キカシグサ属、セリ科などが検出されるほか、花粉（化石）の保存状態も良く、含有量も豊富であった。このようのことから、4区は水成堆積物であり、湿地環境（湿田？）で堆積した可能性が高い。また、4区では遺構、遺物が検出されず、堆積時期が明らかになっていなかった。

一方、5区からは花粉がほとんど検出できなかった。5区の試料は粘土が主体であったが、4, 5層では酸化鉄の検出が顕著で、6層上面には亀甲状の乾痕が、7層ではやや緑灰色を帯びるなどグライ化の兆候が認められた。更に、2, 4, 6層上面では遺構が検出されていた。これらのことから一連の堆積物が、洪水成あるいは陸成の堆積物であるか、穏やかな場所での水成堆積物であったとしても堆積後に酸化・還元環境、あるいは極度の乾燥状態にさらされていた（例えば長い間地表面とであったり、極度に乾燥する時期がある乾田であったり）と推定できる。



第25図 5区の花粉ダイアグラム

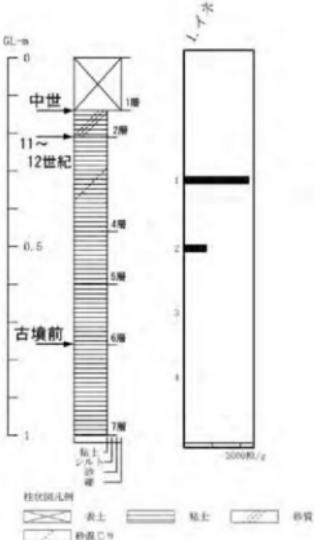
## 古環境推定

### (1) 古地形と遺構の分布

4区と5区では、現在の水田面の標高は+7.0 m程度でほぼ同じであった。ところが、4区では近世の堆積物である5層最下部が+6.1 mであるに対し、5区では中世の遺構面(2層上面)が現代耕土直下の+6.8 mに位置している。恐らく、5区では中世以降、近代まではほぼ同じ(高さ)面で耕作が続いた、あるいは中世以降地表面が削られていったものと考えられる。

これに対し4区では少なくとも近世以降、堆積が続いていることが明らかである。つまり近世には、5区と4区の地面の高さに、少なく見積もって0.5 m近くの差があったことになる。更に中世にこの差は、少なく見積もっても0.7 mには達していたと考えられる。

言い換えると、5区は埋没微高地に位置しており、中世以前の遺構は微高地に分布していたことになる。



第26図 5区の植物珪酸体ダイアグラム

## (2) 古植生変遷

### ① 中世以前

5区では、5層、4層でイネの植物珪酸体が得られている。ここでは、上下（4層から5層）方向の減少が顕著である。一方で、この層準では根跡や果穴と考えられる生痕が顕著に認められ、激しく生物擾乱を受けていることが分かる。これらのことから、検出されたイネの植物珪酸体は、上位の2層あるいは1層（現代水田耕土）から混入したものと推定できる。したがって、5区（古墳時代～中世）での古植生を推定することはできなかった。

4区では、花粉群集の対比から近世（IK-II带）、近代から現代（IK-I带）の2時期の堆積物（局地花粉帶）が認識できた。

### ② 近世

KI-II带とした花粉群集では、近隣の藤ヶ森南遺跡（渡辺、2000）や三田谷I遺跡（渡辺、1999）での分析結果とほぼ同じ木本花粉組成を示すことから、これらの木本花粉の多くは、遺跡の東から南に広がる丘陵から、風や水によって、もたらされたことが分かる。したがって、出雲平野南側の丘陵は、アカマツ林やコナラからなる二次林（いわゆる「里山」あるいは「薪炭林」）で覆われていたと考えられる。

これに対し草本花粉は飛散距離が短く、現地性が高い。イネ科（40ミクロン以上）が多量に検出され、オモダカ属、ホシクサ属、イボクサ属、セリ科、キカシグサ科などの水田雑草を含む種類が検出されることなどから、調査地点が水田であったことが分かる。また、ソバ属の検出は、休耕田や畦を利用したり、裏作でソバ栽培が行われたりしていたことを示唆する。

### ③ 近代から現代

KI-I带とした花粉群集では、スギ属の割合が高いことが特徴である。一方、これまでに出雲平野内で報告されている近代から現代に至る時期の花粉群集では、これほどスギが高率になるケースは例がない。この時期のスギは植林に由来すると考えられるが、より丘陵に近い三田谷I遺跡でもここまでスギが高率になることはなかった。このことから、スギが調査地近辺に生育していたと考えられ、神門寺境内に植えられていた可能性もある。

草本花粉ではこの間でイネ科（40ミクロン以上）の割合が減少傾向を示し、含有量も減少傾向を示す。一方で、胞子の割合、含有量が増加傾向を示すほか、乾燥環境下で生育する種類が多いキク亜科、ヨモギ属、タンポポ亜科の割合、含有量も増加傾向を示す。この時期になると周辺の環境が変化し、水田が減少して荒れ地（草地）が広がっていたものと考えられる（荒れ地（草地）の定義は容易ではないが、植生としては宅地や道路も含まれると考えてほしい）。また、イネ科（40ミクロン以上の割合が減少するが、堆積相などを考慮すると（1）層（試料No1）、2層（試料No2）共に水田耕土の可能性は高い。

## まとめ

神門寺付近遺跡での発掘調査に伴う、花粉、植物珪酸体分析の結果、以下の事柄が明らかになった。

(1) 4区の4試料には、統計処理に十分な量の花粉化石が現有されていた。一方、5区の4試料では、花粉化石の含有量が極めて少なかった。

(2) 4区でIK-I, II帯の局地花粉帶を設定した。更に、近辺の遺跡における分析結果と比較し、IK-I帯が近代から現代にかけての一時期の、IK-II帯が近世の植生を示すことを明らかにした。

(3) 花粉化石の検出状況と、現地での堆積相の観察結果、遺構の分布から、両調査区での堆積環境、土地利用の違いを推定した。4区では湿地環境が続いたが、5区では乾燥環境が続いたと考えられる。

(4) 5区は、古墳時代以降、近世から近代の一時期まで微高地の一部であり人間が活動することが容易な地域であった。一方4区は近世以降現代まで、水田であった。

(5) 近世には遺跡近辺にまとまった林分ではなく、東から南方に広がる丘陵に「里山」が広がっていた。

(6) 近代から現代になると、丘陵にはスギの植林が広がった。一方で遺跡近辺にもスギが植えられた。

### 【引用文献】

- |             |   |
|-------------|---|
| 中村 純 (1974) | イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究, 13, 187-197.                                       |
| 藤原宏志 (1976) | プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) -数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-, 考古学と自然科学, 9, p.15-29.           |
| 渡辺正巳 (1999) | 藤ヶ森南遺跡花粉、プラント・オパール分析、藤ヶ森南遺跡-出雲郵便局移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-, 31-37, 出雲市教育委員会.           |
| 渡辺正巳 (2000) | 三田谷I遺跡c区発掘調査に係る花粉分析、南側調査区三田谷I遺跡-塙治299号線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-, 65-70, 出雲市教育委員会. |
| 渡辺正巳 (2010) | 花粉分析法、必携 考古資料の自然科学調査法, 174-177, ニューサイエンス社.                                      |

## 第5章　まとめ

今回の発掘調査では、一列に並ぶ3穴の柱穴を含む9穴の柱穴と、墓壙1、土坑2を確認すると共に、古墳時代から中世までの遺物が出土した。

遺構は中世の建物に関連する柱穴と考えられ、13世紀以降、現在の神門寺境内東側には寺に関連する何らかの建物が建っていたものと考えられる。

現在の地形と、2層・3層にみられる安定した地盤が存在する調査結果から考えれば、調査5区の範囲は神門寺境内の範囲内である可能性が強い。また、中世の墓壙を検出したことから、境内東側の一部には墓が広がっていた可能性もある。

土層堆積状況と自然科学分析（第4章参照）から、神門寺東側の5区周辺は中世以降、地盤が安定していたことが窺え、その後、田面として利用されながら、削平されていったものと考えられる。柱穴は、2層と5層で検出した。その時期差は不明だが、調査区内では数回建物が建てられている。

一方、4区周辺は湿地環境で堆積していたと考えられる。遺構が検出できなかったことや、自然科学分析の結果から、近世以降は水田であったと考えられるが、神門寺周辺には明治期に用水路が流れしており、調査区が用水に伴う影響を受けている可能性も考慮しておく必要がある。

これらのことから、神門寺周辺では調査1区～4区は近世以降水田又は用水が流れていた範囲である可能性が高く、5区周辺は古墳時代以降、比較的乾燥した微高地として利用されていたと考えられる。

また、今回特筆すべき点として、古墳時代前期の大甕が出土したことが挙げられる。亀裂が入っていたがほぼ完形であり、削平されていたものの掘形が確認できた。古墳時代前期の大甕が埋められていたことは神門寺成立以前の当地（微高地）の様相を考える上で貴重な資料となった。

瓦は、軒丸瓦、丸瓦、平瓦が出土した。神門寺境内廃寺の瓦分類から、丸瓦は1類・4類・5類が、平瓦は7分類のうち、1・2・5・6・7類が出土した。丸瓦で凸面に繩叩き痕が残る2類・3類は出土しなかった。昭和57～59年に調査した現在の境内からは、2類・3類の丸瓦が多量に出土していて、今回の出土の様相とは全く異なるものである。

今後北側へと進む神門寺付近遺跡の調査と併せて、神門寺境内廃寺出土瓦の再検証と、今回の調査における出土遺物について総合的に整理していくことが必要である。



# 写 真 図 版





1. 神門寺付近遺跡遠景（北から）



2. 神門寺付近遺跡遠景（南から）（左上の森が神門寺）

図版2



1. 調査前全景（4区・5区）南から



2. 調査前全景（5区）



3. 調査前全景（4区）



4. 4区遺物出土状況（東から）



1. 柱穴検出状況（北から）



2. 柱穴検出状況（東から）

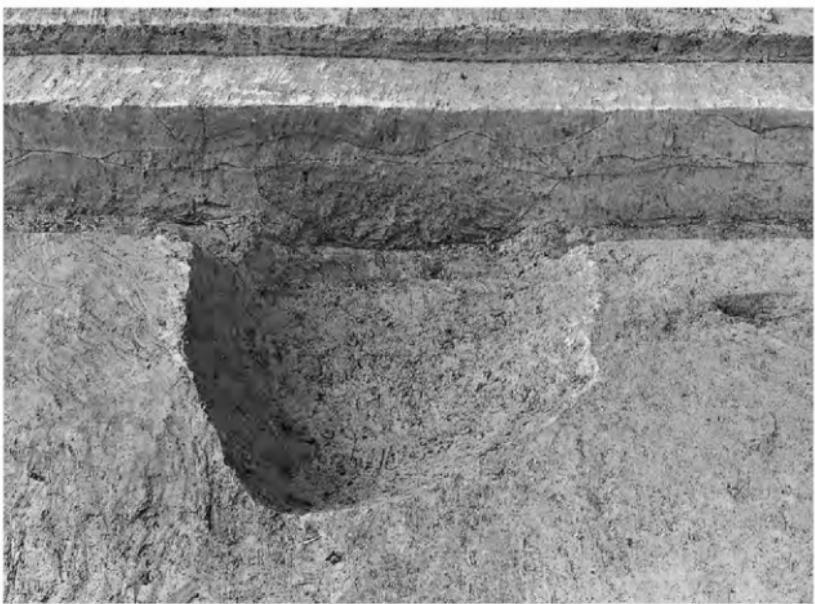
図版4



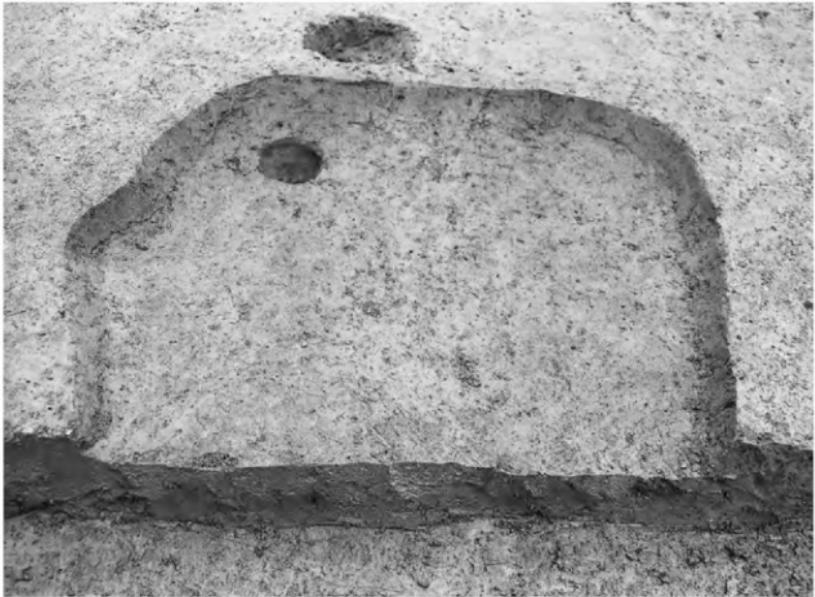
1. 墓壙遺物検出状況（東から）



2. 墓壙遺物検出状況（北から）

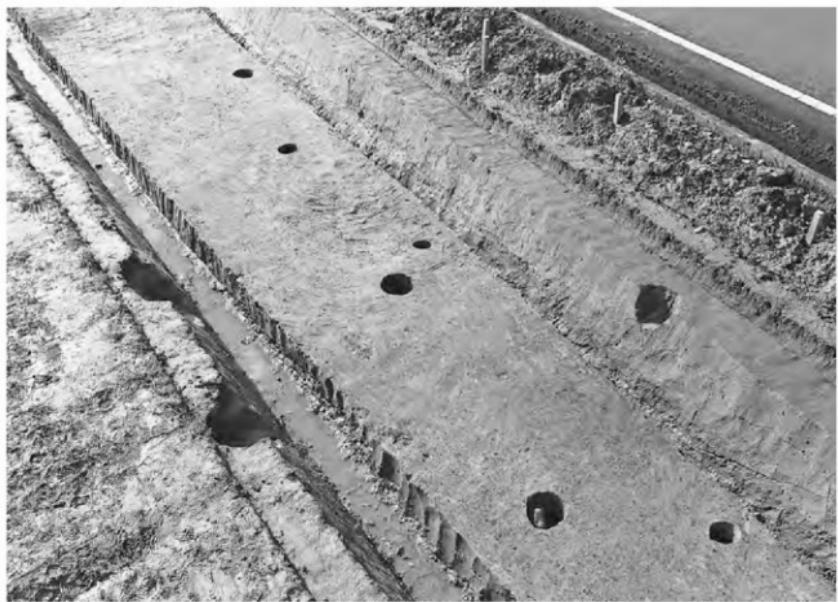


1. 墓塚完掘状況（東から）

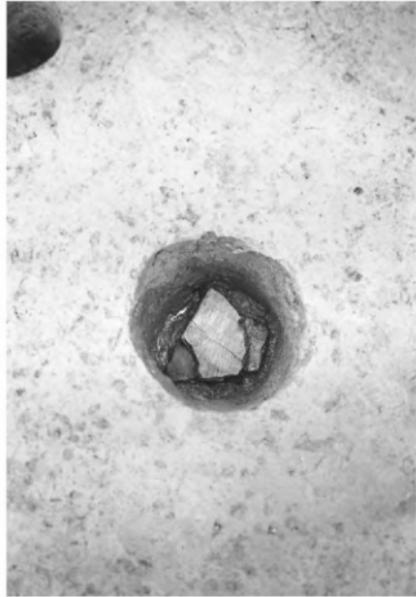


2. SK01 完掘状況（西から）

図版6



1. 柱穴検出状況（北東から）



2. 柱穴（SP10）内遺物出土状況（東から）



3. 柱穴（SP11）内遺物検出状況（東から）

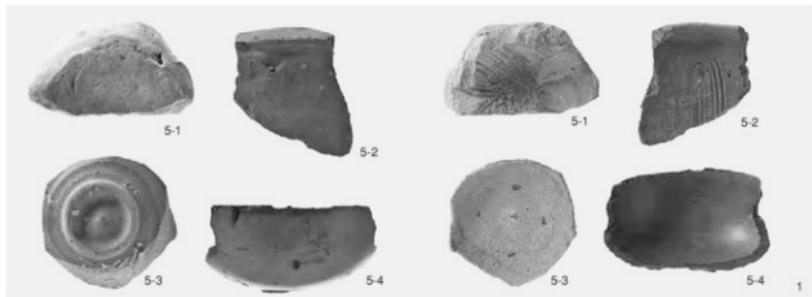


1. 壺出土状況（東から）

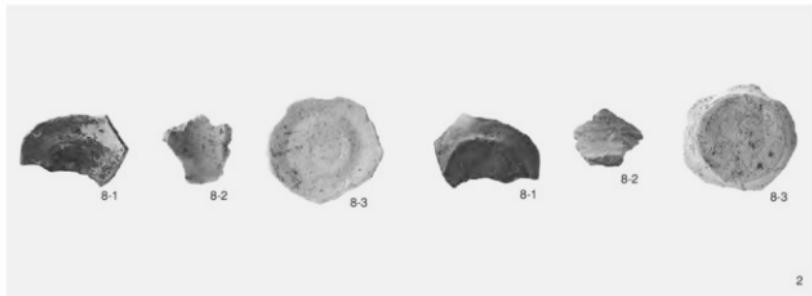


2. 壺出土状況（南東から）

図版8



1



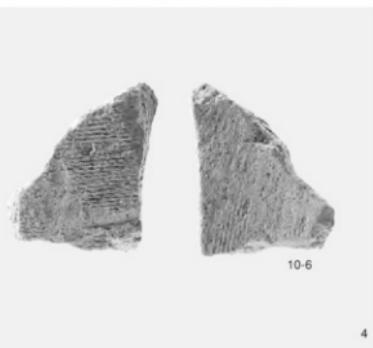
2



5

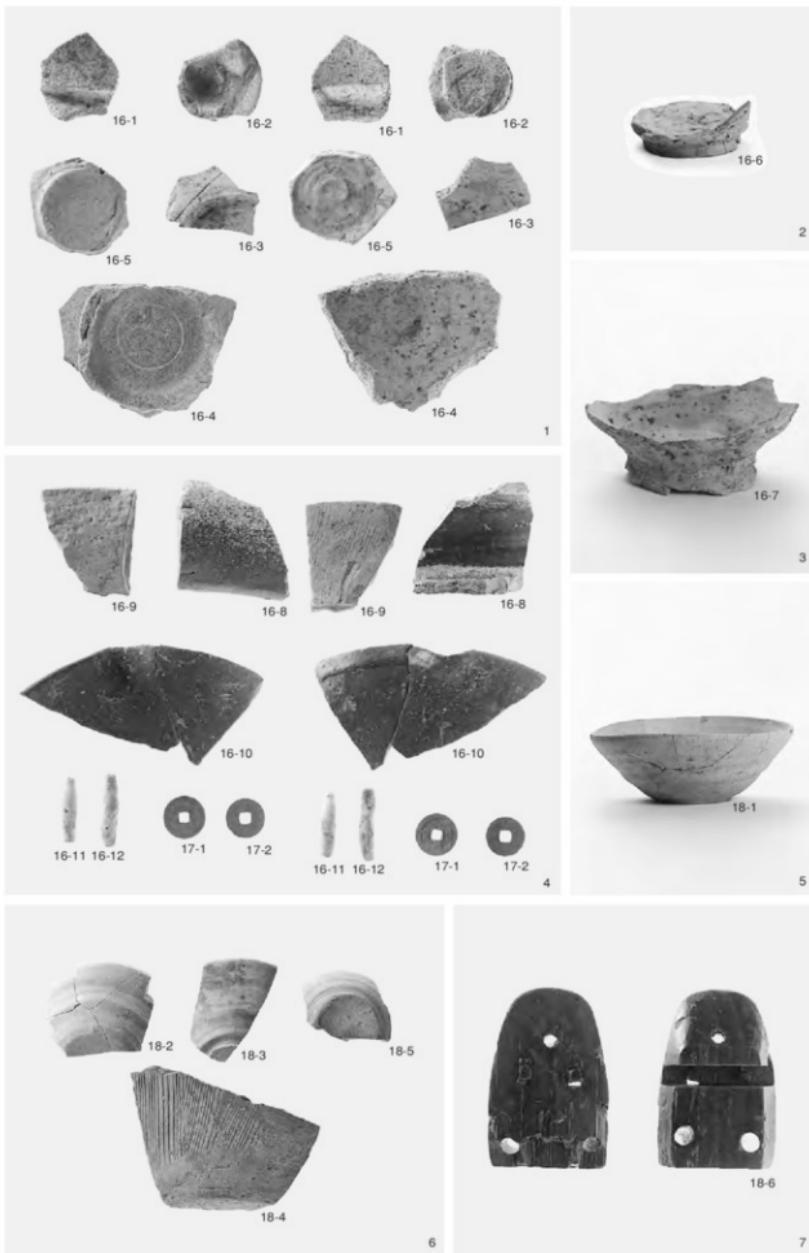


3

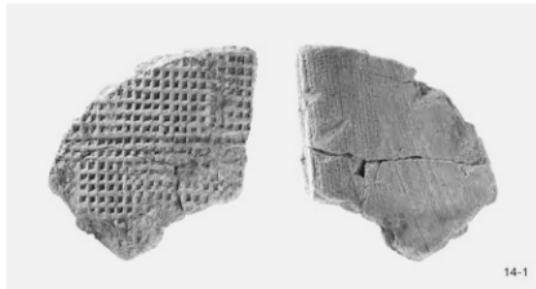


4

1. 4区出土遺物 2. 5区柱穴（SP01・03）出土遺物 3～5. SX01 出土遺物



1~7. 5区造構外出土遺物



14-1



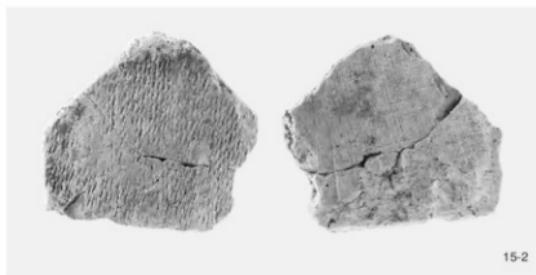
14-2



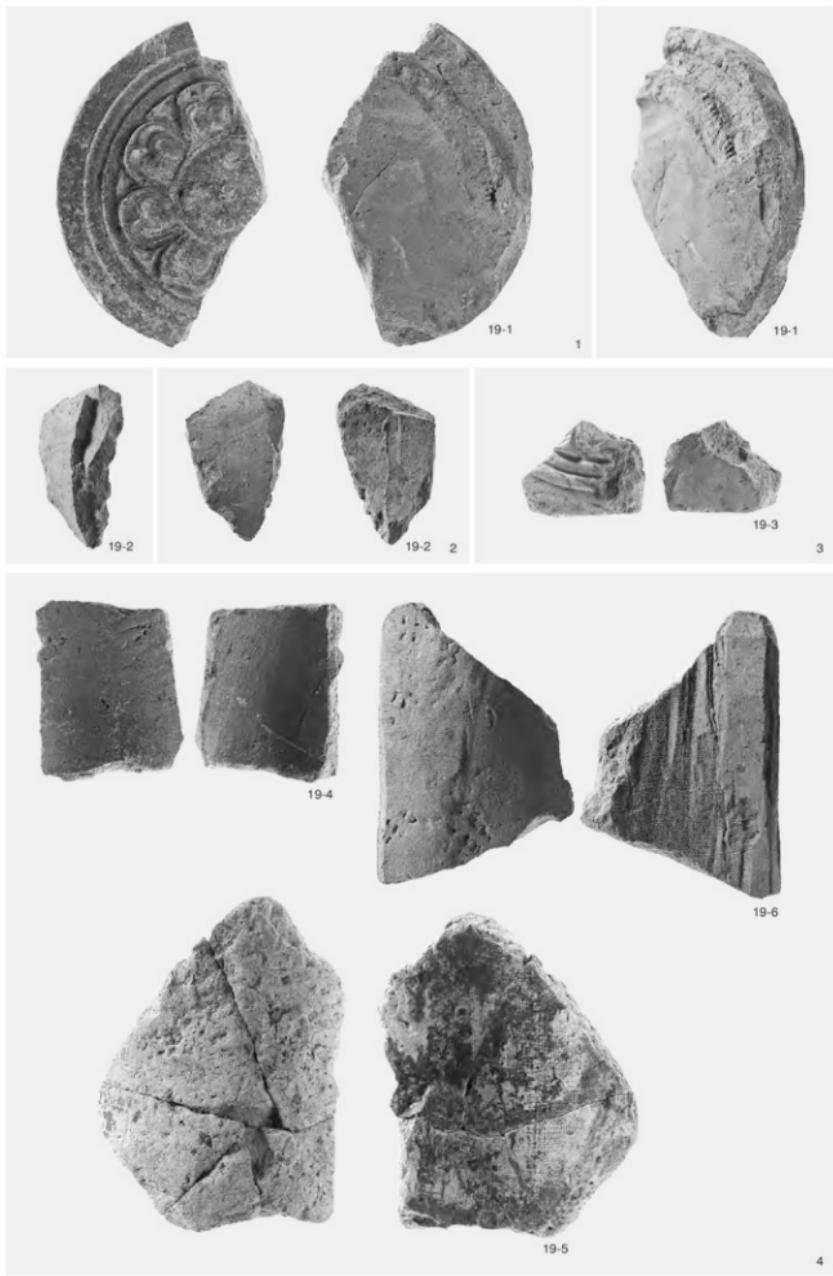
14-3



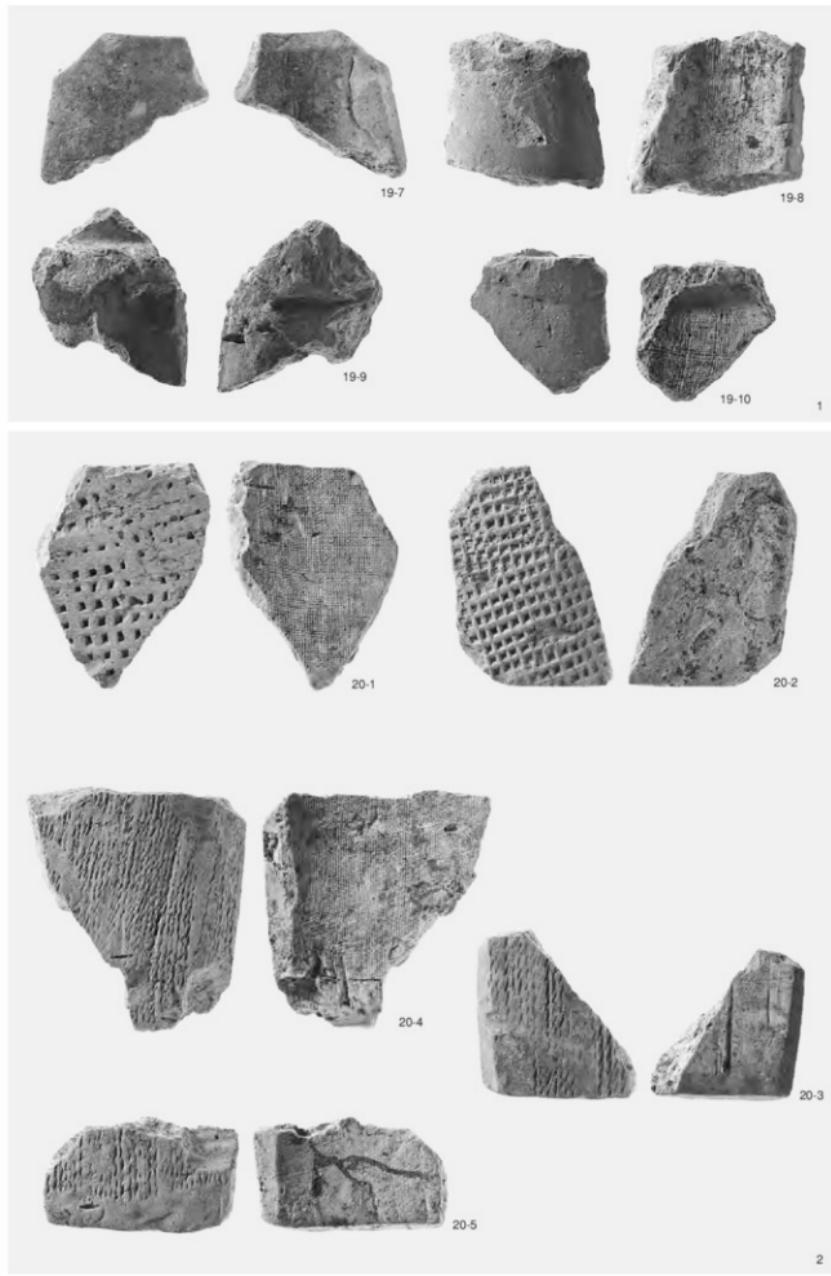
15-1



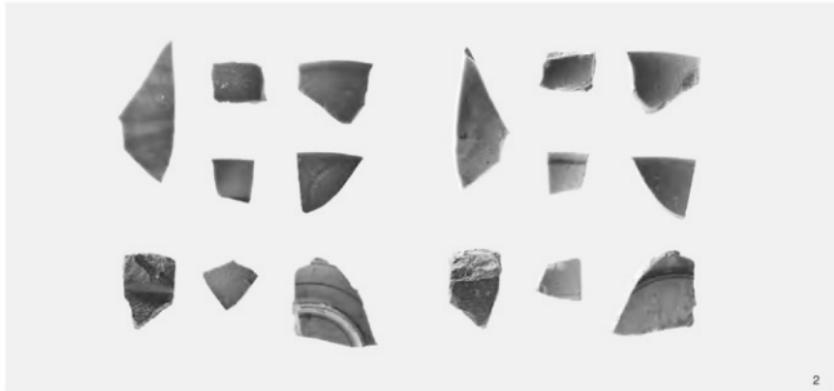
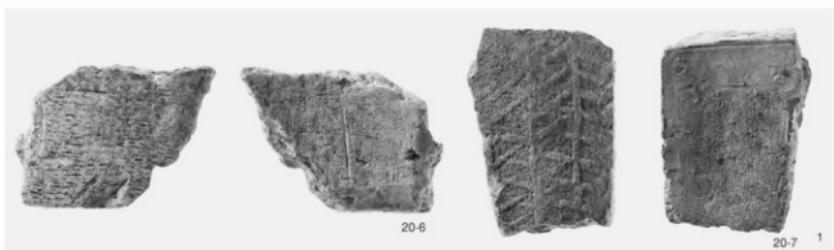
15-2



1~3. 5区出土瓦（軒丸瓦・丸瓦）



1. 5区出土瓦（丸瓦） 2. 5区出土瓦（平瓦）



1. 5区出土瓦（平瓦） 2. 5区出土陶磁器 3. SK01 出土遺物



## 報告書抄録

## 出雲市の文化財報告 13

出雲都市計画道路医大前新町線3工区道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書2

## 神門寺付近遺跡Ⅱ

平成22年（2010）3月31日

編集 出雲市 文化企画部 文化財課  
出雲市大津町2760

発行 出雲市教育委員会  
出雲市今市町70

印刷 株式会社報光社  
出雲市平田町993